

総説

堀川久美子¹: 日本における遺跡出土カゴ類の基礎的研究Kumiko Horikawa¹: Basket materials used from the Jomon period to the Muromachi period in Japan

要旨 日本列島における遺跡出土カゴ類・編物の時空的分布と、素材や編組技法における時期差・地域差を明らかにするため、縄文時代から室町時代における遺跡出土カゴ類の集成を行った。1980（昭和55）年以降に報告された資料の集成を行った結果、123遺跡、1146点の遺跡出土カゴ類・編物を確認することができた。素材の地域差については、東北・関東付近にタケ・ササ類のカゴ類が多く、西の方へいくにつれてタケ・ササ類以外の素材（ヒノキ、マタタビ属、イヌビワ属等）が占める割合が多くなる傾向が認められた。また、日本海側においてはタケ・ササ類以外の素材が多く利用される傾向があることを示した。編組技法では、北陸を除き全国的に広義の網代編みが多い傾向がみられた。また、地域ごとに素材に合った編組技法が定着するとともに編組技法に合った素材選択がなされていた可能性を指摘した。タケ類・ワラ類の導入時期については、状況証拠から弥生時代後期であるという仮説がたてられているが、ワラ類については実物の遺物がほとんどなく、画期とよべる時期を特定できなかった。タケ類については、縄文・弥生・古墳～平安時代のカゴ類における素材の割合を示し、古墳時代以降タケ類素材のカゴ類は増加したと考えられるが画期とは言いがたい点を指摘した。また、マダケは13世紀後半～14世紀にはカゴ類の素材として使用されていたと推測され、モウソウチクはカゴ類の素材として使用された時期を特定することができなかった。

キーワード: 編組技法, 縄文時代, タケ類, 編組製品, 室町時代, ワラ類

Abstract To clarify materials and weaving technique, 1146 baskets excavated from 123 archaeological sites of the Jomon to the Muromachi periods are compiled. No baskets were made of straw, and it was unknown when straw was began to be used for basket weaving. Baskets made of bamboos increased around the Kofun period, but it did not lead to any drastic change in basket making after this period. Regional difference in basket materials clearly existed, bamboos in the Tohoku and Kanto districts and plants other than bamboos in the Hokuriku district. Baskets were mostly woven by various wickerwork except for the Hokuriku district.

Keywords: baskets, bamboo, Jomon to Muromachi periods, straw, weaving technique

はじめに

カゴ類は縄文時代以来、運搬や食料保存のための道具として、近現代にいたるまで頻繁に使用されてきている道具であり、その基本的形態や編組技法などは、縄文時代当初から大きく変わることなく続いている。カゴ類に使用される素材や編組技法は、作られた当時の植生や、また人びとが使っていた技術やモノ作りの考え方に関する情報が含まれており、カゴ類の研究を行うことは、それらを明らかにする上で重要なことである。

近年、全国各地の低湿地遺跡からカゴ類が出土する例が次第に増加してきた。また、カゴ類の研究では、実際の遺物や素材の分析結果に基づく検討が必要となってきた。

本稿においては遺跡出土カゴ類・編物の基礎的な情報を整理し、情報を元に素材や編組技法の検討を行うことで、上記の問題を明らかにするための一助としたい。

カゴ類研究の目的と方法

1. 研究対象

木を細く割り裂いたものや木の皮、植物のツルや繊維などを編組してつくったものは多くあり、その呼び方は「編組製品」、「編物状製品」、「繊維製品」など個人や発掘報告書によって多様である。また同様の呼び方であっても異なるものを対象とする場合もあり、混乱を避けるために本稿で使用する用語の意味を明確にしておきたい。

まず、何らかの素材を細長い状態にしたものを本稿では「ヒゴ」とする。ヒゴを編組してつくったものを「編組製品」と呼ぶ。「編組製品」の中でも特に細い糸状の繊維などを素材として編んだり撚ったりしたものを「繊維製品」とする。

繊維製品以外の編組製品に関しては、その形状から立体的なものと平面的なものに分け、遺物の残存状態によりどちらにも分類の判断がつかないものは広く「編物」とする。立体的なものには「カゴ」、「ザル（笊）」、「ウケ（筥）」、「ミ

¹ 〒464-8601 名古屋市中千種区不老町 名古屋大学文学部人文学科考古学専攻（現：日立ソリューションズ）
（現住所：〒244-0816 横浜市戸塚区上倉田町 347-416）

School of Letters, Nagoya University, Furo-cho, Chikusa-ku, Nagoya, 464-8601, Japan

(箕)」,「編袋」が該当する。また,カゴ類の表面に漆を塗って仕上げた「籃胎漆器」も立体的なものにあたる。籃胎漆器は,漆製品の研究を行っている永嶋(1985)によると,「典型的な漆製品であり,(中略)また,容器型籃胎漆器の骨格は,ザル・カゴなどの編組製品であり,別種の技術体系を見ることもできる」とされ,カゴ類の編組技法などを研究する上でも重要となるため,本稿においても研究対象とする。平面的なものには「スダレ(簾)」,「ムシロ(蓆・席)」などが該当する。

本稿では,先述した編組製品のうち立体的なものを「カゴ類」,平面的なものを「敷物類」と呼ぶこととする。また,繊維製品の中では,布状のものを「アンギン(編布)」,撚ってつくられた紐・縄状のものを「紐・縄」と呼ぶ(図1)。本稿で研究対象とするのは繊維製品以外の編組製品であり,中でも立体的なものである「カゴ類」とカゴ類になりうる「編物」を中心に扱う。また,研究対象とする地域は日本列島で,時代は縄文時代～室町時代である。近世の遺跡出土カゴ類・編物はごくわずかであり,今回の集成において検討できるほどの資料がないため,室町時代までを対象とした。

2. 研究史と問題の所在

1) 研究史

編組製品の研究史は2期に分けることができる。すなわち,第1期は1899(明治32)年～1979(昭和54)年,第2期は1980(昭和55)年～現在である。また,第1期の前に「編組製品研究の前段階」という区分を設け,1877(明治10)年～1898(明治31)年とした。

編組製品研究の前段階:1877(明治10)年～1898(明治31)年

遺跡出土の編組製品の存在が指摘された時期である。1877(明治10)年にE.S. モースは,大森貝塚出土の土器底部に編物の圧痕を発見し,1879(明治12)年に「網代圧痕」と報告した(モース,1929)。また,陸平貝塚(現在の茨城県稲敷郡美浦村)出土土器においても編物圧痕があることが1880(明治13)年に佐々木忠二郎(原著には「忠三郎」とあったが誤植と思われる)・飯島魁によって報告されている(佐々木・飯島,1880)。しかしながら,これらは土器底部の編物圧痕を報告したに留まっていた。

第1期:1899(明治32)年～1979(昭和54)年

編組製品について研究が開始された時期である。この時期においてはまだ編組製品の实物資料が存在しない,あるいは資料数がわずかであったため,主に土器底部の編物圧痕や民具などの民俗事例を利用した編組技法の分類が中心であった。

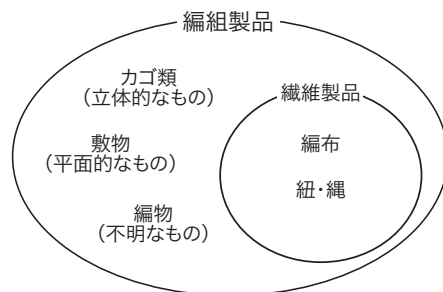


図1 編組製品の分類。

Fig. 1 Classification of basket materials.

第1期の区分の根拠となるのは1899(明治32)年の坪井正五郎による論文(坪井,1899)である。坪井は土器について「網代形編み物」の圧痕を観察し,編組技法によって分類をした。分類をする際,「超え・潜り・送り」という表現を使用している。坪井は,ある一定方向に走るヒゴを「経」,それに対して編んだり組まれたりするヒゴを「緯」とした。左から右へ,緯が経の表側に出て裏側へ入っていくまでの過程を「超え」,経の裏側に入り表側へ出て行くまでの過程を「潜り」と呼び,これらの過程において経何本分超えたか・潜ったかということを示す「○本超え」,「○本潜り」という表現で表した。また,ある緯に対してその1本下の緯が経に対して何本分ずれているかということを示す「○本送り」と呼び表している。これらは現在の,遺跡出土の編組製品研究においても編組技法を細分する基礎的な表現法となっている。

1927(昭和2)年には,大里雄吉が編組製品の实物資料を最初に報告した。大里(1927)は青森県は川遺跡の編物を「網代様編物」と称した。またその数ヵ月後には杉山寿栄男が同遺跡における同資料を含む遺物について考察を加えている(杉山,1927)。

实物資料が出土したとはいえ,資料数はまだわずかであったため,大里らの報告以降も土器底部の編物圧痕研究が主となる。荒木ヨシは1968(昭和43)年から1971(昭和46)年にかけて土器底部の編物圧痕を調査し,編組技法の詳細な分類を行い46種類に分類した。また編組技法の地方差や時期差を指摘し,利用法の検討も行った(荒木,1968,1970,1971,1995)。

渡辺誠は,編物圧痕の中でも錘具を用いたもじり編み製品の圧痕である「スダレ状圧痕」を民俗事例と対比した(渡辺,1976)。渡辺は1979年に,縄文時代の綴じ針について検討し,縄文時代のカゴ類研究を行う際の基礎的資料の素描を行った(渡辺,1979)。カゴ類を検討する際の基礎的資料として,「カゴ類の現物そのもの」,「編物断片」,「編物圧痕」,「骨製綴じ針」,「カゴ類を模した土器」,「礫石錘

を含めた編物の錘具」の6つを挙げた。この素描は後の研究にも大きく活用されている。

第2期：1980（昭和55）年～現在

出土資料の増加により集成がなされ、研究が展開した時期である。第1期では資料数の関係から土器底部圧痕による編組技法の研究が中心であったが、第2期では実物資料による素材ごとの研究が広まっていく。

第2期の区分となるのは、植松なおみによるカゴ類の資料集成である（植松，1980）。植松は、まず渡辺（1979）をもとにカゴ類を分類した。編物自体の遺物である「直接資料」、カゴ類や編物の存在を明確に裏付ける資料である「間接資料」、カゴ類の存在を示唆する「類推資料」の3つに大きく分けた。さらに「直接資料」には「カゴ類と判断するのが可能な資料」であるカゴ類と、「カゴ類と断定するには不十分だが同様の編組技法が行われている断片」である編物を分類した。また「間接資料」には「カゴ類の存在を明確に裏付ける資料」と「編物の存在を裏付ける資料」があり、前者にはカゴを型として成形されたカゴ型土器、後者には土器底部の編物圧痕を分類した。さらに「類推資料」には土器に施文された文様や有足土器、綴じ針・礫などの製作道具を分類した。以上のように細分した後、植松は遺跡出土カゴ類・編物の集成を行い、編組技法の傾向などを検討した。

この集成研究を受けて、実物資料による編物の素材に関する検討がなされていく。山本直人は石川県におけるワラ・タケ以外（ヒノキ、マタタビ）の編組製品について、実物資料と土器底部圧痕資料を民俗調査と素材同定の結果を関連させて考察し、冬に湿度が高いという北陸の気候がカゴ類の製作にあたって重要な要因になっていたことを指摘した（山本，1989）。1990年代においては渡辺誠が編組製品の素材を民俗事例や土器底部の編物圧痕と対比して検討する研究を積極的に行った。カゴ類の編組技法と素材について福岡県辻田遺跡のタケ製ウケをはじめとする実物資料をもとに検討し、現在のカゴ類に主に使用されるタケ・ワラの素材が出現し、利用される弥生時代後期をカゴ類の画期とした（渡辺，1994）。また、タケ・ワラ類の素材が使用される以前にカゴ類に使われていた素材としてマタタビをとりあげ、民俗事例と圧痕の比較を行った。マタタビ製編物の圧痕であると思われる東北型底部圧痕と、民具としてのマタタビ製カゴ類の日本列島における分布が一致したことから、マタタビにはタケ・ワラ類による素材置換の影響がなかったと指摘した（渡辺，1996）。その後、民具の収集を報告して考察を加えている（渡辺，1999）。

編組技法に関する研究は2000年代に入ってから進展し、分類を経て整理される傾向がみられる。名久井文明は

従来の「〇〇編み」という呼称の編組技法をヒゴ同士の重なり方により「組む」技法と「編む」技法に区別し、縄文時代の編組製品の編組技法と民俗事例を詳細に比較検討した（名久井，2004）。野田真弓は編組製品を立体的な製品と平面的な製品に分け、編組技法・カゴ類の部位などの用語定義や分類をした上で鳥取県青谷上寺地遺跡出土資料の検討をし、弥生時代における他地域の編組製品との比較も行った（野田，2005）。また佐々木由香は編組製品の素材について検討し、素材の地域性などを指摘した（佐々木，2006a）。さらに柳原梢子は縄文時代のカゴ類について集成し、出土状況や編組技法に關しての考察を加えた（柳原，2008，卒業論文）。

2) 問題の所在

以上の研究史を踏まえて、現状での研究課題として以下の3点を指摘する。

まず、最も基本の情報となる遺跡出土カゴ類の集成が行われていない点である。植松（1980）による集成がなされた後、約30年間遺跡出土カゴ類の全国的な集成は行われていない。近年、柳原（2008）が集成を行っているが、縄文時代に留まっている。カゴ類の研究をする上では空間的分布に加え時間的分布も考慮せねばならず、さらに広い時間軸を視野に入れた集成は極めて重要であると考えられる。さらに1980年以降、全国の低湿地遺跡において出土状態が良好な遺物例が格段に増加してきた。そのため、これらの遺物を集成し、今後のカゴ類研究においても基礎となる情報を提示することが必要である。

次に、素材や編組技法の研究において、カゴ類の実物資料に基づく研究が少ない点が挙げられる。編組技法の分類はすでに多くなされているが、編組技法の地域差や時期差などは各研究者の見聞を頼りにしているものや一部の遺跡から出土した遺物例を挙げているにすぎない。素材の研究に關しても現在のところ、渡辺（1996）のマタタビに關する研究など一部の素材のみに注目した研究はあるが、素材ごとの割合を調べて比較する研究はまだない。

最後に、カゴ類における素材の画期とされるタケ・ワラ類に關する再検討が必要となっている点である。渡辺（1994）はタケ・ワラ素材の導入がカゴ類製作に關する画期となると主張した。そして、タケ類による編組製品の出現は刃物となる鉄器の普及が重要であり、庶民が細工物に自由にナイフなどを使えるようになるのは弥生時代後期であると述べた。またワラ類による編組製品の出現も弥生時代後期であると述べており、その理由として弥生時代後期に石包丁が激減し、穂首刈りから根刈りへの変化があることや、弥生前期に伝わったとされるヨコヅチが細長く軽いダイズ・アズキの収穫用から太く短く重いワラ打ち用に変

化すること、またワラ細工に用いられるモチ品種のワラが渡来することを挙げた。近年、縄文時代の遺跡からタケ・ササ類の編組製品が出土したこともあり、佐々木 (2006a) は「編組製品の画期は弥生時代後期以降のワラ製品の導入 (渡辺, 1996) と、中世以降といわれるマダケと近世以降といわれるモウソウチクの導入である」としている。

以上のように、一部の出土例からタケ類の画期は少しずつ見直されている。しかしながらこれらの画期は状況証拠をもとにしたもので、実物資料をもとに包括的に検討された研究はなく、裏づけのないまま現在に至っている。

3. 研究の目的と方法

本稿では、日本列島における遺跡出土カゴ類・編物の集成を行い、素材や編組技法における時期差・地域差を明らかにし、状況証拠から弥生時代後期とされているタケ・ワラ類の導入時期を検証する。

これら三つの目的に対して、以下のように検討を行う。まず、植松 (1980) の集成以降に報告されたカゴ類・編物の集成を広い時間軸を視野に入れて行う。次に、集成をもとに素材と編組技法における時期差・地域差を実際の遺物を裏付けとして明らかにしていく。以上の集成や検討をもとに、日本列島におけるタケ・ワラ類の導入時期について論究する。

青谷上寺地遺跡 (鳥取県鳥取市) は報告書における記載が詳細になされているため (野田, 2005), 遺跡出土カゴ類・編物一覧表 (表2) に記載をしていない。また東名遺跡 (佐賀県佐賀市) は、報告書が未刊行であるため、概報の写真から分かる範囲で10点を抽出して記載した。

編組製品の概要

1. カゴ類の特性と構成

編組製品の中でも、カゴ類・編物は植松 (1980) の「直接資料」にあたる。カゴ類を構成する要素として部位とヒゴがある。

部位

カゴ類の部位は野田 (2005) の定義を基本とし、本稿でも各名称についてはこれに倣う。カゴ類の底面つまり底の部分を「底部」と呼ぶ。カゴ類の側面部を「体部」と呼び、体部はさらに「帯部」と「体部上・下部」に分かれる。「帯部」は体部上部・下部の基本の編組技法とは異なる編組技法が带状に施される部分を指す。帯部には底部に近い「底縁帯部」、中央に施される「中央帯部」、カゴの口縁に近い「口縁帯部」がある。体部下部は底縁帯部と中央帯部には含まれている部分、体部上部は中央帯部と口縁帯部には含まれている部分を指す。帯部が存在しないカゴ類も多く存在する。また、カゴ形成後にカゴの縁を折り返して巻くなどし

て縁の始末をした部分を「縁仕舞」と呼ぶ。縁仕舞も含めた、カゴ類の上部を「口縁部」と呼ぶ。

しかし近年では、佐賀県の東名遺跡において大型のカゴや編袋が出土し、それらはさらに多くの帯部が存在することが明らかとなっている。柳原 (2008) は「体部上部帯部」、「体部下部帯部」などの名称を利用しているが、分類が多様かつ煩瑣になりすぎる恐れがあるため、本稿においては集成表の分類に関して、帯部の有無に関わらず、「口縁部」「体部」「底部」の3つの部分に区別して表記した。

ヒゴ

何かしらの素材を細長くしたものでカゴ類を構成する一本一本のヒゴ状のものを「ヒゴ」と呼ぶ (佐々木, 2006b)。ヒゴは、カゴ類においては木を割り裂いたものや木の皮である樹皮、植物のつるなどがある。そして、これらのヒゴがカゴ類においてどういう役割を果たすかによって名称が異なってくる。

本稿においては、佐々木 (2006b) に基づき、坪井 (1899) の「経」を「タテ材」、「緯」を「ヨコ材」と呼ぶ。すなわち、カゴ類の底部から立ち上げて体部の形成を行うヒゴを「タテ材」と呼ぶ。タテ材は編む作業に直接関わらない、動きのないヒゴである。次に、タテ材の間を縫うようにして動く材を「ヨコ材」と呼ぶ。タテ材に対して編みこむという認識であり、直接編む作業を行うヒゴである。

そして、ヒゴを捻ったり撚ったりすることを「もじる」というが、タテ材やヨコ材に巻きつけたり、もじったりするヒゴを「巻き付け材」と呼ぶ。

タテ材、ヨコ材共に同じ動きをする遺物もあるが、これらのタテ材・ヨコ材の区別については各報告書の記述に沿って判断した。

これらのヒゴは基本的に1本ずつ使用して編んだり組み合わせたりするが、底部や大型のカゴ類をつくる際に複数本のヒゴがまとまって同じ動きをすることがある。このとき、同じ動きをする本数を表すために「〇本一単位」という用語が利用され、2本のヒゴがまとまって同じ動きをしているときは「2本一単位」と表現する (野田, 2005)。

2. 編組技法の分類

編組製品の編組技法は主に、「底部・体部に利用される編組技法」と「口縁部に利用される編組技法」がある。本稿で取り上げる遺跡出土遺物に施されている編組技法を、野田 (2005)、渡辺 (1994)、大分県別府産業工芸試験所 (1991) に基づき、以下のようにまとめる (図2・3)。

1) 底部・体部に利用される編組技法

大きく分けると、網代編み、ごぎ目編み、四つ目編み、六つ目編み、もじり編み、コイリングの6つに分けられる。

網代編み

タテ材とヨコ材を、間隔を開けずに密に組み合わせる規則正しい筋違編みが現れているものを網代編みと呼ぶ。基本的にヒゴの幅はタテ材ヨコ材ともに一定している。網代編みはヨコ材の動きに注目して、ヨコ材が何本超えて何本潜って何本送ったかによって細分する。例えば、図2の1は「2本越え2本潜り1本送り網代編み」と呼ぶ。また、表記する際には「2:2:1 網代編み」という表現を用いる。

網代編みの中でも、図2の2のような1本越え1本潜り1本送りの網代編みを「市松編み」と呼ぶこともある(佐々木, 2006a; 柳原, 2008)。しかし、本稿においては名称の過剰な使用による混乱を避けるため「1:1:1 網代編み」と呼ぶ。

図2の3は「桧(ます)網代編み」と呼ばれる編組技法である。この編組技法は中心がはっきりしており、周囲に向かって桧目が広がっていく。ヒゴ同士が密に編まれ筋違の編みが規則正しく現れるため網代編みに分類されている。

ござ目編み

「ござ目編み」は、1本越え1本潜り1本送りの網代編みにおいてタテ材同士の間隔を開けたものである。ヨコ材同士は密であるが、タテ材同士はおおよそタテ材1本分以上の間隔が開いている。また、ヒゴの幅はヨコ材よりタテ材の方が太い場合が多い(図2の4)。「ざる目編み」と呼ぶこともあるが、本稿においては「ござ目編み」の名称で統一した。

ござ目編みの応用として「飛びござ目編み」と「木目ござ目編み」がある。「飛びござ目編み」はござ目編みが1:1:1に対して、超え・潜り・送りが複数本になった編組技法である。例えば図2の5は「2:1:1 飛びござ目編み」となる。また、「木目ござ目編み」は飛びござ目編みの変形であり、飛びござ目を編む途中で折り返して流れを変えた編組技法で、くの字状の模様ができる(図2の6)。

四つ目編み

「四つ目編み」もござ目編みと同じく1本越え1本潜り1本送りで構成される編組技法であり、タテ材同士の間隔とヨコ材同士の間隔がほぼ同じくらい開いている。ヒゴの幅もほぼ同じで、タテ材とヨコ材は直交する(図2の7)。四つ目編みの応用として、タテ材とヨコ材がナナメに交わる「菱四つ目編み」もある(図2の8)。また、四つ目編みに別のヒゴを斜めに巻きつけて固定する技法もある(谷口・山本, 1999)。

六つ目編み

水平と右ナナメ・左ナナメの3方向からのヒゴがそれぞれ1本越え1本潜りをして六角形を形成する編組技法である。ヒゴの幅やそれぞれのヒゴ同士の間隔も3方向ともにほぼ同じである。六角形のほかに三角形も形成される(図

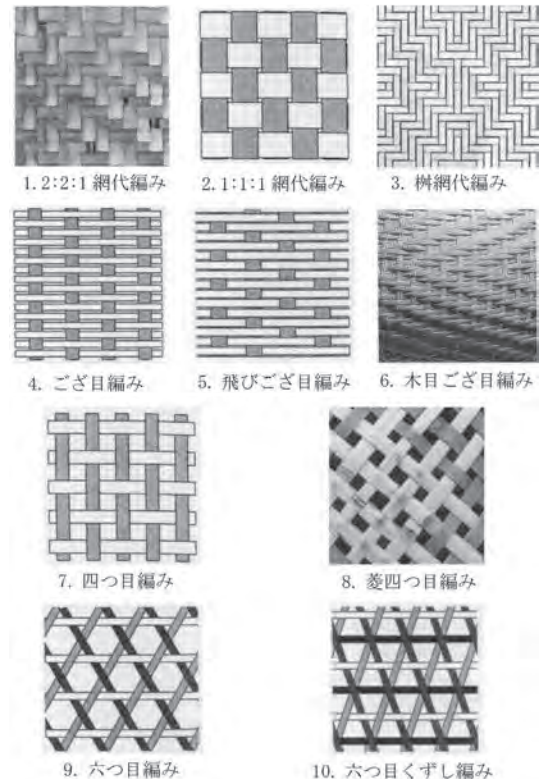


図2 編組技法模式図 (1) (1, 6, 8: 工藤, 1982; 3: 大分県別府産業工芸試験所, 1991; その他: 下宅部遺跡調査団, 2006).
Fig. 2 Illustration of variety of weaving (1) (1, 6, 8: Kudo, 1982; 3: Beppu Oita Industrial Art Institute, 1991; others: Shimoyakebe Investigation Committee, 2006).

2の9)。ナナメ方向の構造や三角の構造は強度を増す効果があり、六つ目編みはこれを生かした編組技法である。

また、「六つ目くずし編み」(図2の10)は六つ目編みのほぼ中央に水平のヒゴを一本足して編む技法である。

もじり編み

タテ材と2本の巻きつけ材で構成される。タテ材1本を2本の巻きつけ材で挟み、タテ材とタテ材の間でねじっていく編組技法である。ヒゴをねじる、すなわちもじることから「もじり編み」と呼ばれる。もじり方向によって右撚りのものと左撚りのものに分けられる(図3の1・2)。基本的に巻きつけ材は2本であるが、1本の巻きつけ材でもじっているものもある。これらを区別するため、1本の巻きつけ材でもじっているものを「1本もじり編み」とする。また、一般に巻きつけ材2本でもじっているものを「もじり編み」と呼ぶが、本稿では区別を明確にするため、敢えて「2本もじり編み」と呼ぶ。

「ヨコ添えもじり編み」(図3の3)は、タテ材の上にヨコ材を重ね、タテ材とヨコ材の交差部分を2本の巻きつけ材でもじって、巻き留める編組技法である。

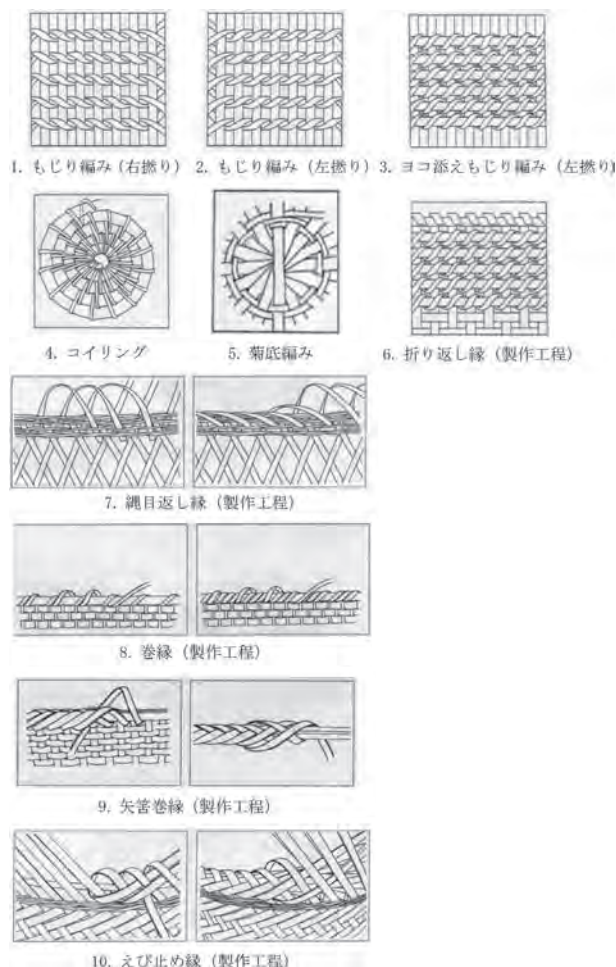


図3 編組技法模式図 (2) (1-4, 6: 野田, 2005; 5: 額田, 1965; 7-10: 大分県別府産業工芸試験所, 1992).

Fig. 3 Illustration of variety of weaving (2) (1, 4, 6: Noda, 2005; 5: Nukata, 1965; 7-10: Beppu Oita Industrial Art Institute, 1992).

コイリング

芯となるヒゴを渦巻状にし、別の巻きつけ材で芯となるヒゴを螺旋状に巻き上げて固定していく編組技法である (図3の4)。「巻き編み」と呼ばれることもある。コイリングに関しては渡辺誠により鳥取県教育文化財団 (1993) の中で説明されている。

以上が底部・体部に利用される編組技法である。この他に、底面に施される技法として「菊底編み」がある (図3の5)。これは、芯となるヒゴ (体部におけるタテ材) を放射状に置き、別のヒゴ (ヨコ材) でタテ材を螺旋状に網代編みやもじり編みなどで編み込んで底部を形成する技法である。比較的硬くて弾力の強い素材が用いられる。

また、ごぎ目編み・四つ目編みは「広義の網代編み」と

呼ばれる場合もある。「1:1:1 網代編み」とこれらの編組技法は互いにタテ材とヨコ材の間隔のみで分類されているため、残存状態によっては区別がしにくい。広く「タテ材とヨコ材を組み合わせで何本か超え・潜り・送りを施したもの」と考えるとこれらの編組技法は互いに類似した編組技法といえる。

出土した編組製品の上下が不明であった場合、タテ材とヨコ材の区別がつかないことはよくある。この場合、基本的には動かない方をタテ材、もしくは太い方をタテ材とした。

2) 口縁部に利用される編組技法

口縁部の縁仕舞に利用される編組技法は大きく4つある。折り返し縁、縄目返し縁、巻縁、矢筈巻縁である。

折り返し縁 (図3の6)

体部を形成して余ったタテ材を折り曲げて、下方の体部に差し込んで縁の処理を行う編組技法である。野田 (2005) では「縦芯材折り込み縁」と呼ぶ。

縄目返し縁 (図3の7)

縁仕舞の手前でもじり編み (縄目編み) をし、そこに折り返し縁と同様に余剰のタテ材を折り曲げて差し込み、縁の処理をする方法である。

巻縁 (図3の8)

1本の巻きつけ材で、余剰のタテ材に何周か巻きつけて縁を巻きつづす方法である。巻縁の特殊な編組技法が四方谷岩伏遺跡 (福井県福井市) にある。報告した鈴木 (2004) は、「カゴの上から観察して、左回りに直角に折った縦材を、外面から2本、内面から2本、計4本を1単位として、2本飛ばしで束ね、幅8cmの樺状樹皮を4~6巻しており、隙間が大きい箇所は後で補充して巻いているようである」としている。

矢筈巻縁 (図3の9)

例えばタテ材を5本分飛んでは4本分巻き戻り、8の字状に巻いていく方法である。真上から見ると矢筈模様になることから「矢筈巻縁」と呼ばれる。

この他、朝日山 (2) 遺跡 (青森県青森市) において、縁仕舞が「じゃばら巻き」もしくは「えび止め縁 (図3の10)」とされている藍胎漆器が出土している。じゃばら巻きとは、刀の柄に施される巻き方のひとつである。えび止め縁は余剰のタテ材を横向きに曲げて巻いて縁としたものであるが、朝日山 (2) 遺跡出土藍胎漆器の実測図と写真では上記の編組技法は確認できなかった。

以上が口縁部に利用される編組技法である。この他、ミ (箕) などの製品においては、体部を形成したヒゴを木枠に挟み、その上から樹皮や別のヒゴで巻いて固定したものが、表2において「木枠に巻きつけ固定」と表記した。

日本における遺跡出土カゴ類

1. 分析の対象

1) 遺跡出土カゴ類の集成

1980年以降、約30年間に出土例が報告された遺跡を集成した結果、123遺跡を確認した(表1, 図4)。遺物数は1146点以上で、そのうち遺物の詳細データを得られた製品は資料番号1~419の684点である(表2)。資料番号一つにつき個体が複数存在するものもあるので、資料番号419と確認点数684点が一致していない。

上記の1146点に関して、遺跡ごとの出土点数は1点から200点以上までさまざまである。一つの遺跡で70点以上出土している遺跡には、忍路土場遺跡(北海道小樽市)210点、青谷上寺地遺跡(鳥取県鳥取市)74点、正福寺遺跡(福岡県久留米市)140点、東名遺跡(佐賀県佐賀市)200点以上がある。次節では、統計処理上の過大な影響を無くすため、これらを一旦除外して統計処理をおこない、考察の段階で再度それらを加えて検討する。これらを除外した場合の遺物数は522点となる。

また、以下の遺跡ではカゴ類・編物の出土情報を得ながらも、カゴ類・編物の記述を直接確認できなかった。北海道: 柏木B遺跡(恵庭市)・朱円遺跡(斜里町)・美沢1遺跡(苫小牧市)、青森県: 福泉遺跡(五所川原市)、秋田県: 中山遺跡(五城目町)・船越一向遺跡(男鹿市)、福島県: 寺脇貝塚(いわき市)、茨城県: 福田貝塚(東村)、埼玉県: 北島遺跡(熊谷市)・真福寺貝塚(岩槻市)・後谷遺跡(桶川市)、神奈川県: 平沢同明遺跡(秦野市)・平遺跡(大磯町)、山梨県: 朝気遺跡(甲府市)(未報告)、石川県: 藤江B遺跡(金沢市)、静岡県: 白岩遺跡(菊川町)、滋賀県: 入江内湖西野遺跡(米原町)・筑摩佃遺跡(米原町)・霊仙寺遺跡(栗東市)、京都府: 栢杜遺跡(京都市)、大阪府: 志紀遺跡(八尾市)・若江遺跡(東大阪市)、兵庫県: 本山遺跡(神戸市)、奈良県: 島の山古墳(川西町)、鳥取県: 桂見遺跡(鳥取市)、島根県: 神田遺跡(松江市)、広島県: 道照遺跡(東広島市)。

2. 時間的分布・空間的分布

1) 時間的分布

集成に基づき、まず分布や出土状況について、「縄文時代」、「弥生時代」、「古墳時代以降」の3つに分け、時期ごとに概観する。

縄文時代

522点中295点、全体の57%が縄文時代の製品であり、カゴ類の出土数をもっとも多い時期である。70点以上出土している遺跡も考慮に入れると、1146点中845点以上が縄文時代である。全体の74%となり、縄文時代の割合がより大きくなる。正福寺遺跡と東名遺跡を除くと、遺跡数は44である。また、一つ一つの遺跡における出土遺物数

が他の時期より多い。つまり遺跡の規模が大きな遺跡において出土しているということが考えられる。また、近年に発掘・報告された遺跡が多い。例えば、下宅部遺跡(東京都東村山市)、青田遺跡(新潟県加治川村)、桜町遺跡(富山県小矢部市)、メノト遺跡(静岡県掛川市)などの遺跡で良好な出土例がある。これらの要因があつてか、カゴ類の素材の同定まで行われている例が多い。

柳原(2008)によると、カゴ類は貯蔵穴からの出土が多く、貯蔵穴の側面や底面に付着しているもの(曾畑貝塚(熊本県宇土市)・メノト遺跡など)や、貯蔵穴の上部を覆うように出土するもの(南方前池遺跡(岡山県山陽町)など)、貯蔵穴付近から横倒しの形で出土するもの(龍頭遺跡(大分県山香町)など)などがあり、前2者は通気性・通水性を生かしてカゴや蓋など堅果類の保存に役立てたと考えられ、三つ目に関しては運搬具や容器として利用していたものが廃棄された可能性が指摘されている。

また、縄文時代前期~晩期には藍胎漆器が出土し、水場遺構からの出土のほか、墓からの出土がある。

他に製品の特徴として「編袋」が挙げられる。これは龍頭遺跡と正福寺遺跡や東名遺跡など主に九州地方にみられる。大きさは長さ約2mもある大型のものから数10cmの小型のものまでさまざまである。大型のものに関しては、堅果類を貯蔵する際に、貯蔵穴の底面・側面の保護と蓋の役割を果たす道具として使われたと考えられる(柳原, 2008)。また、運搬具として編袋を活用していたことも考えられる(大分県教育委員会, 1999)。

弥生時代

弥生時代のカゴ類は522点中105点で、全体の20%にあたる。遺跡数は38遺跡あり、多くの遺跡から少数ずつ編組製品が出土している。この時期には、ウケやミが多くなる。ウケは流路や河道で出土している。

遺物数からみると、弥生時代前期にはかなり少なく8点しかない一方、弥生時代中期になるとその点数は52点と大幅に増加する。遺跡数も前期の7遺跡から中期の17遺跡と倍以上になる。弥生時代後期は17遺跡から29点出土しており、中期に急激に増え、後期もまたカゴ類の製作は盛んであることが伺える。上記に青谷上寺地遺跡出土遺物74点を加えると、前期が8遺跡12点、中期が18遺跡106点、後期が18遺跡43点となる。ここから、青谷上寺地遺跡を考慮に入れても前期における出土量の少なさと中期に大きく増加していることが分かる。

遺物点数が少ないためか、弥生時代の遺跡出土カゴ類では素材の同定が行われていないものが多い。

古墳時代以降

古墳時代以降は、各時代における編組製品の出土数がごくわずかであるため一括した。それでも522点中44点で

全体の8%と圧倒的に少ない。

古墳時代以降のカゴ類出土遺跡をみると、近年発掘された例はわずかであった。また、素材の同定も古墳時代以降の遺跡出土遺物に関しては多くはなく、見た目の質などでタケ製品と判断している例も少なくない。

2) 空間的分布

つぎに分布のまとまりごとに、北海道、東北、関東、北陸、東海、関西、四国・中国、九州、沖縄の9つに区分してそれぞれの傾向をみる。

北海道

7遺跡218点の出土で、そのほとんどが忍路土場遺跡の出土例である。忍路土場遺跡を除くと6遺跡8点にすぎない。

出土遺物の傾向としては、縄文時代は籃胎漆器のみで、墓・土坑からの出土である。平安時代以降の遺物としては、編物や編袋（頭陀袋？）が出土している。

東北（青森・秋田・岩手・宮城・山形・福島）

12遺跡で出土している。明確な点数が掲載されていない報告書もあるため、遺物数は50と数点である。そのうち29点が籃胎漆器である。

関東（茨城・栃木・群馬・埼玉・東京・千葉・神奈川）

17遺跡で139点が出土している。出土点数が多いのは下宅部遺跡で、49点が出土しており、またその他の各遺跡においては数点ずつの出土である。寺野東遺跡（栃木県小山市）・下田遺跡（群馬県新田町）・寿能泥炭層遺跡（埼玉県大宮市）では籃胎漆器が出土しており、これらの遺跡以北を関東北部とし、東北・関東北部における籃胎漆器の分布帯とする。出土地点は土坑や河道がほとんどであった。

北陸（新潟・富山・石川・福井）

23遺跡で109点が出土している。青田遺跡（新潟県加治川村）・桜町遺跡（富山県小矢部市）・中屋サワ遺跡（石川県金沢市）など縄文時代中期以降の遺跡において編組製品が多く出土している。また、古墳時代以降においてもカゴ類の出土が何点かみられる。

分布をみると、青田遺跡のみは北陸の他の遺跡から離れて位置しており、東北との関わりも十分に考えられる。青田遺跡を除けば、他の遺跡は互いに大きく離れてはいない。

東海（静岡・愛知・岐阜）

12遺跡で66点が出土している。分布としては静岡県の遺跡群と愛知県・岐阜県の遺跡群の2つに分けられる。長野県や三重県には分布が全くみられなかった。

関西（滋賀・大阪・兵庫・奈良）

18遺跡で52と数点が出土している。縄文時代・弥生時代・古墳時代以降でほぼ同じ数が出土している。

四国・中国（高知・香川・愛媛・鳥取・島根・岡山・広島・山口）



図4 カゴ類出土遺跡分布図（遺跡番号は表1参照）。

Fig. 4 Location of sites with basket remains in Japan (For site numbers refer to Table 1).

19遺跡で38点が出土している。出土状況については、縄文時代の貯蔵穴からのカゴ類出土がいくつかみられる。また、集計には含んでいないが、この地域には縄文時代晩期から弥生時代中期中葉にかけての遺跡である青谷上寺地遺跡が存在する。青谷上寺地遺跡を加えた場合、20遺跡で112点となり、同遺跡がこの地域における編組製品のほとんどを占める。

九州（福岡・佐賀・大分・長崎・熊本）

12遺跡で386点が出土している。正福寺遺跡と東名遺跡を除くと10遺跡46点となる。この2遺跡と曾畑貝塚（熊本県宇土市）・龍頭遺跡（大分県山香町）が九州における編組製品の出土数をほぼ占めている。これらのほとんどが縄文時代の貯蔵穴からの出土である。

沖縄

2遺跡で14点の出土である。遺跡数も遺物の出土点数も少ないが、地理的に離れているため区分を分けた。

3. 考察

これまでの研究では、カゴ類の実物資料に基づく総合的な研究が少なかった。ここでは、集成に基づいた素材や編組技法の検討を行う。特に、カゴ類における素材の画期と考えられているタケ・ワラ類に関する検討を中心に行う。

1) タケ・ワラ素材の画期

まずカゴ類における素材の中でもワラ類とタケ類に関する考察を行い、カゴ類における素材の画期の再検討をする。

①ワラ類について

ワラとは、イネなどイネ科植物の茎を乾燥させたものである。ワラ類の導入は、石包丁の激減、ヨコヅチの形態変化、稲のモチ品種渡来という要因から弥生時代後期であると渡辺 (1994) は考えており、これがカゴ類における素材のひとつの画期とされている。この画期について、実際のカゴ類・編物のデータから検討を行う。

検討を行う際、注目すべき製品は、素材が「ワラ」または「イネ科植物」と同定されるものである。しかしながら、イネ科の植物の中にはタケ類も含まれており、明確にワラ・イネであると同定されない限りは区別ができない。

集成した結果、遺跡出土カゴ類の中で素材がワラ・イネと同定されているものは存在しなかった。素材の同定はされていないがワラと推測されているものに高館遺跡 (青森県黒石市) における中世の敷物状編物がある。この編物については「原料はワラのように、一部には籾・米が付着していた」 (北林, 1978) とあり、ワラである可能性は高いが解剖学的に確かめられてはいない。また、朝日遺跡 (愛知県清須市ほか) における弥生時代中期 (貝田町期) の編物は、「幅 0.3–0.5cm のワラ状のものが束になってかたまっている中で 1 部に 2 本超え、2 本潜り、2 本送りの目の粗い筥編みがみられる」 (石黒, 1982) と記されているが所見にすぎない。高館遺跡・朝日遺跡の遺物はともに写真や実測図が掲載されておらず、検証できない。

また、イネ科植物と同定されているものをみていくと、東京都の下宅部遺跡における縄文時代後期前葉の筵が「イネ科」 (鈴木・佐々木, 2006), 新潟県の青田遺跡における縄文時代晩期終末のカゴ類が「イネ科?」とされている (石丸, 2004; 鈴木ほか, 2004)。

以上の点から、ワラ類の導入時期に関して、渡辺 (1994) は状況証拠から弥生時代後期が導入時期であるという仮説をたてているが、現時点においてもワラ類の実物の遺物はほとんどなく、その裏付けをとることができないのが現状である。今回の集成においてはワラ類の画期を求めることはできなかったが、今後ワラ類に注目した素材調査がなされることでこの画期を再度検討する必要がある。

②タケ類について

タケ類素材の導入に関して、渡辺 (1994) は弥生時代後期を画期とした。また佐々木 (2006a) はタケ類の画期として中世以降のマダケ導入と近世以降のモウソウチク導入を挙げた。これらの画期に関して、タケ類素材を利用したカゴ類の時間的分布をみて検討する。

遺跡出土遺物を素材ごとに分けて遺物数の統計をとった。

当時、本州・四国・九州と文化が大きく異なっていたと考えられている北海道と沖縄は除外し、それ以外における遺跡を対象とした。また、1 つの遺跡で結果が大きく左右されることを避けるため、青谷上寺地遺跡・正福寺遺跡・東名遺跡も統計からは除外した。

統計の結果、縄文時代はタケ類 56 点、他素材 80 点、不明 130 点、弥生時代はタケ類 12 点、他素材 25 点、不明 68 点、古墳時代～平安時代はタケ類 11 点、他素材 11 点、不明 10 点であった (図 5)。どの時代においても素材が不明のものが多くあるが、タケ類と他素材のみに注目してみると、縄文時代においてはタケ類と他素材の割合が 2:3、弥生時代が 1:2、古墳時代が 1:1 となっている。タケ類の占める割合は縄文時代から弥生時代になると少し減りはするがあまり変わらず、古墳時代に増加しているようにみえる。ここから考えられることとしては、縄文時代から弥生時代にかけては、時代の変化による素材選択に影響はあまりなく、ササ類などの小型で比較的加工のしやすい植物を利用していた可能性がある。そして、鉄器の普及により大型のタケ・ササ類の加工が容易になり、古墳時代にそれらを利用したカゴ類が加わると想定される。つまり、鉄器の普及に伴いタケ類素材の利用可能性が広がったことにより、タケ類素材のカゴ類が増加したと考えられる。鉄器の普及がカゴ類の素材選択に影響を与えたことは十分に考えられるが、この出来事がカゴ類の画期となるかどうかは定かではない。

また、佐々木 (2006a) が述べているマダケ属のマダケとモウソウチクに関して遺物から検討する。マダケを素材としているものに、反町遺跡 (埼玉県東松山市) のカゴがある。これは、幅 2 cm 前後のマダケを割り裂いたヒゴを利用した六つ目編みのカゴである。解剖学的な分析ではタケ亜科とされ、節や稈の肉眼観察によりマダケであると推定している (能城ほか, 2009)。このカゴは AMS 炭素 14 年代測定により 13 世紀後半から 14 世紀のものであることが分かっている。よってこの時期にはマダケが存在することが予想される。今回集成した資料には、モウソウチクを素材とするカゴは見つからなかった。

マダケ属の地上茎とされているカゴ類に、下郡桑苗遺跡 (大分県大分市) のカゴと編物が 4 点ある (染矢, 1992)。しかし素材同定においては「竹筴類 Subfam. *Bambusoideae*」とあり (能城, 1992), マダケ属の地上茎、すなわち桿、が何の根拠に基づくものかは記載からは分からない。この遺物は共伴遺物である土器片の型式から弥生時代中期前葉とされている。もしこのカゴ類・編物がマダケ属で、かつマダケもしくはモウソウチクであったとしたら、弥生時代中期前葉にはいずれかがすでに存在していたことになり、カゴ類におけるタケ素材の画期は大きく遡る

表 1 カゴ類・編物出土遺跡一覧表

Table 1 List of archaeological sites with basket remains

遺跡番号	所 在 地	遺 跡 名	時代・時期	点数	文 献
1	北海道目梨郡羅臼町	植別川遺跡	擦文～近世	1	羅臼町教 1981
2	北海道根室市	別当賀一番沢川遺跡	縄文中期		根室市教 1986
3	北海道小樽市	忍路土場遺跡	縄文後期	210	北海道埋文 1989
4	北海道十勝郡浦幌町	十勝太若月遺跡	縄文～擦文	1	石橋ほか 1974
5	北海道白老郡白老町	社台 1 遺跡	縄文晩期中葉	1	北海道埋文 1981
6	北海道上磯郡木古内町	大釜谷 3 遺跡	縄文前期～晩期	1	木古内町教 2003
7	北海道松山郡上ノ国町	夷王山墳墓群	室町・戦国	4?	上ノ国町教 1984
8	青森県青森市	朝日山 (2) 遺跡	縄文・平安	3	青森県埋文調セ 2004
9	青森県青森市	三内丸山遺跡	縄文	5	青森県教育庁文化課 1996, 青森県教 1998
10	青森県黒石市	高館遺跡	縄文・中世	2	青森県教 1978
11	青森県北津軽郡板柳町	土井 1 号遺跡	縄文後期末・晩期	16	板柳町教 1993
12	青森県平川市	八幡崎遺跡	縄文晩期	2 以上	工藤 1979
13	秋田県秋田市	戸平川遺跡	縄文	3	秋田県埋文 2000
14	岩手県盛岡市	料内遺跡	縄文	数点	岩手県埋文 1982
15	岩手県西磐井郡平泉町	柳之御所遺跡	12 世紀～近世以降	1	岩手県教 2001
16	宮城県岩出山町	根岸遺跡	縄文後期・晩期	6	宮城県教 1981
17	宮城県多賀城市	山王遺跡	古墳～中世	3	多賀城市埋文調セ 1991,1997, 山田 2003
18	山形県東置賜郡高畠町	押出遺跡	縄文	2 以上	山形県教 1990
19	福島県大沼郡三島町	荒屋敷遺跡	縄文・弥生	7	三島町文化財専門委員会 1990
20	茨城県鹿島郡鹿島町	豊郷条里遺跡	古墳～平安	2	鹿島町遺跡保護調査会・鹿島町教 1983
21	栃木県鹿沼市	明神前遺跡	縄文	1	鹿沼市教 2002
22	栃木県小山市	寺野東遺跡	縄文	12	栃木県文化振興事業団 1998
23	群馬県新田郡新田町	下田遺跡	縄文・古墳	2	新田町教 1994
24	埼玉県比企郡吉見町	三ノ耕地遺跡	縄文～古墳・中世	6	弓 1998
25	埼玉県東松山市	反町遺跡	弥生～古墳	4	埼玉県埋文調事 2009
26	埼玉県大宮市	寿能泥炭層遺跡	縄文	5	埼玉県立博物館 1984
27	東京都葛飾区	葛西城址	中世・近世	3	葛西城址調査会 1974,1975,1978
28	東京都中野区	北江古田遺跡	縄文中期～後期	6	東京都中野区 1987
29	東京都練馬区	弁天池遺跡	縄文後期	4	練馬区遺跡調査会 1989
30	東京都東村山市	下宅部遺跡	旧石器～縄文晩期	49	下宅部遺跡調査団 2006
31	東京都青梅市	馬場遺跡	旧石器～中世	1?	青梅市教 1984
32	千葉県茂原市	国府関遺跡群	弥生末～古墳初頭	4 以上	長生郡市文化財センター 1993
33	千葉県君津市	常代遺跡	弥生	5	君津郡市文化財センター 1996
34	神奈川県川崎市	多摩区 No.61 遺跡	縄文	6	多摩区 No.61 遺跡発掘調査団 1998
35	神奈川県逗子市	池子遺跡群 1-A 地点	弥生	26	かながわ考古学財団 1999
36	神奈川県小田原市	羽根尾貝塚	縄文前期	3	玉川文化財研 2003
37	新潟県北蒲原郡加治川村	青田遺跡	縄文晩期終末	9	新潟県教・新潟県埋文調事 2004
38	富山県中新川郡上市町	江上 A 遺跡	弥生中期～後期	4	富山県埋文 1981
39	富山県小矢部市	桜町遺跡	縄文～中世・近世	46	小矢部市教 2007
40	石川県珠洲市	北方 B 遺跡	弥生・中世	1	石川県教・石川県立埋文 2006
41	石川県鳳至郡能都町	真脇遺跡	縄文	2	能都町教 1986
42	石川県羽咋郡志賀町	鹿首モリガフチ遺跡	弥生	1	石川県立埋文 1984
43	石川県鹿島郡鹿西町	谷内ブンガヤチ遺跡	弥生～江戸	1	石川県立埋文 1995a
44	石川県羽咋郡志雄町	荻市遺跡	縄文～中世	1	石川県埋蔵文化財保存協会 1998
45	石川県金沢市	戸水 C 遺跡	弥生・古墳	1	石川県立埋文 1986, 山本 1989
46	石川県金沢市	西念・南新保遺跡	弥生中期・後期	2	金沢市 1992
47	石川県金沢市	大友西遺跡	弥生・古墳	3	金沢市 2002,2003
48	石川県金沢市	畝田西遺跡群	縄文～中世	1	石川県教 2005
49	石川県金沢市	金石本町遺跡	奈良～平安	3?	石川県立埋文 1989
50	石川県金沢市	福増カワラケダ遺跡	弥生・古墳・奈良・平安	1	金沢市 2006
51	石川県金沢市	中屋サワ遺跡	縄文	11 以上	金沢市 2009
52	石川県小松市	高堂遺跡	弥生末期～中世	1	石川県立埋文 1990
53	石川県小松市	荒木田遺跡	奈良・鎌倉	1	石川県立埋文 1995b
54	石川県小松市	佐々木アサバタケ遺跡	弥生後期末～中世	1	石川県立埋文 1988a,1988b
55	石川県小松市	白江梯川遺跡	弥生後期	1	久田ほか 2008
56	石川県小松市	八日市地方遺跡	弥生中期	7	小松市教 2003
57	福井県鯖江市	四方谷岩伏遺跡	縄文後期後葉～晩期前半	3	福井県教育庁埋文調セ 2004
58	福井県福井市	糞置遺跡	弥生～古墳	1	福井市 1990
59	福井県三方郡三方町	北寺遺跡	縄文中期～後期	7	三方町教 1992
60	静岡県静岡市	瀬名遺跡	弥生中期～近世		静岡県埋蔵文化財調査研 1994
61	静岡県静岡市	有東遺跡	弥生	18	静岡県教 1983
62	静岡県藤枝市	宮塚遺跡	弥生	1	藤枝市教・藤枝市埋蔵文化財調査事務所 1981

表 1（続き） Table 1 (continued)

63	静岡県島田市	上反方遺跡	鎌倉～江戸		静岡県埋蔵文化財調査研 1995
64	静岡県掛川市	メノト遺跡	縄文・中世	19	掛川市教 2006
65	静岡県磐田郡福田町	元島遺跡	弥生中期・古墳中期	1	静岡県埋蔵文化財調査研 2005
66	静岡県浜松市	角江遺跡	弥生中期～後期	1	静岡県埋蔵文化財調査研 1996
67	愛知県春日井市	松河戸遺跡	弥生前期中頃～後半・鎌倉～室町	3 以上	春日井市教 2000
68	愛知県西春日井郡清洲町	朝日遺跡	弥生	13	愛知県教 1982, 愛知県埋文 2007
69	愛知県西春日井郡清洲町	朝日西遺跡	中世	6	愛知県埋文 1992
70	愛知県稲沢市	下津城跡	中世	1	稲沢市教 1982
71	岐阜県大垣市	荒尾南遺跡	弥生～古墳	3	大垣市教 2008
72	滋賀県守山市	下之郷遺跡	弥生中期	数点	大角ほか 2002
73	滋賀県守山市	赤野井湾遺跡	縄文・弥生	4	滋賀県教・滋賀県文化財保護協会 1998
74	滋賀県大津市	栗津湖底遺跡	縄文	10	滋賀県教・滋賀県文化財保護協会 2000
75	滋賀県大津市	穴太遺跡	縄文・7～8世紀	1	滋賀県教・滋賀県文化財保護協会 1997
76	奈良県奈良市	平城宮跡	奈良	5 以上	奈良研 1981,1982
77	奈良県天理市	南六條北ミノ遺跡	古墳	11	本村・相見 2003
78	奈良県桜井市	河西遺跡	古墳後期	1	桜井文協 1991
79	奈良県宇陀郡大宇陀町	本郷大田下遺跡	縄文後期～晩期・古墳	1	奈良県立橿原考古学研 2000
80	大阪府寝屋川市	高宮八丁遺跡	弥生前期～中期	2	寝屋川市教 1989
81	大阪府東大阪市	鬼虎川遺跡	弥生前期～中期	5	東大阪市民協 1987,1988a,1988b
82	大阪府東大阪市	巨摩遺跡	弥生中期～後期・古墳前期	1	大阪文化財センター 1995,1981
83	大阪府東大阪市	山賀遺跡	弥生後期～古墳	2	大阪文化財センター・大阪府教 1983, 大阪文化財センター 1984
84	大阪府八尾市	恩智遺跡	弥生	1	瓜生堂遺跡調査会 1980
85	大阪府大阪市	瓜破遺跡	弥生	1	大阪市文協 2002
86	兵庫県津名郡東浦町	佃遺跡	縄文中期～晩期	1	兵庫県教埋蔵文化財調査事務所 1998
87	兵庫県神戸市	下小名田遺跡	平安	1	淡神文協 1993
88	兵庫県神戸市	玉津田中遺跡	弥生中期	3 以上	兵庫県埋蔵文化財調査事務所 1996a,1996b
89	兵庫県姫路市	丁・柳ヶ瀬遺跡	弥生	2	兵庫県教 1985
90	香川県高松市	多肥松林遺跡	弥生中期	2	香川県埋文調セ 1999
91	香川県三豊郡豊中町	延命遺跡	弥生・中世	1	香川県教 1990
92	高知県南国市	奥谷南遺跡	縄文～弥生	2	高知県文化財団埋文 1999
93	高知県土佐市	居徳遺跡群	縄文～弥生	2	高知県文化財団埋文 2001,2002,2003
94	愛媛県松山市	釜ノ口遺跡	弥生～古墳	1	松山市教 1997
95	鳥取県岩美郡福部村	栗谷遺跡	縄文前期～古墳	2	福部村教 1989
96	鳥取県鳥取市	布勢遺跡	縄文中期～中世	3	鳥取県教育文化財団 1981
97	鳥取県鳥取市	青谷上寺地遺跡	縄文晩期～弥生中期後葉	74	鳥取県埋文 2005,2008
98	鳥取県西伯郡淀江町	福岡遺跡	弥生	1	鳥取県教育文化財団 1993
99	鳥取県米子市	池ノ内遺跡	弥生後期～古墳後期	1	米子市教ほか 1986
100	島根県出雲市	姫原西遺跡	弥生後期～中世	1	島根県教 1999
101	島根県出雲市	三田谷Ⅰ遺跡	縄文～平安	2	島根県教 2000, 島根県埋文調セ 2003
102	岡山県津山市	美作国府址	弥生中期～後期・古墳後期	1	岡山県教 1974
103	岡山県赤磐郡山陽町	南方前池遺跡	縄文晩期～奈良	7	山陽町教・近藤 1995
104	岡山県岡山市	百間川米田遺跡	縄文～中世	1	岡山県古代吉備文化財センター 2002
105	岡山県岡山市	百間川原尾島遺跡	弥生前期～中世	1	岡山県教 1984
106	岡山県岡山市	津島遺跡	弥生	4	岡山県古代吉備文化財センター 2000,2003
107	岡山県岡山市	南方（済生会）遺跡	弥生	3?	岡山県教 2005
108	広島県福山市	草戸千軒町遺跡	鎌倉～室町	1	広島県教・広島県草戸千軒町遺跡調査研 1993, 広島県立歴史博物館 2005
109	山口県阿武郡阿東町	宮ヶ久保遺跡	弥生	2	阿東町教・山口県埋文 1998
110	福岡県北九州市	辻田西遺跡	弥生中～後期・中世	2	北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1982
111	福岡県福岡市	比恵遺跡	弥生	2	福岡市教 1990,1991
112	福岡県久留米市	正福寺遺跡	縄文	140	久留米市 2006
113	佐賀県神埼郡神埼町	詫田西分貝塚	弥生前期～中世	2	千代田町教 1983
114	佐賀県佐賀市	東名遺跡	縄文早期末	200 以上	佐賀市教文化財課 2008, 能城ほか 2009
115	佐賀県佐賀市	平尾二本杉遺跡	弥生～中世	1	佐賀市教 2002
116	大分県速見郡山香町	龍頭遺跡	縄文～古代	9	大分県教 1999
117	大分県大分市	下郡桑苗遺跡	弥生	4	大分県教 1992
118	大分県大分市	横尾貝塚	縄文	1	大分市教 2008
119	長崎県杵岐郡郷ノ浦町	名切遺跡	縄文	2 以上	長崎県教 1985
120	熊本県宇土市	曾畑貝塚低湿地遺跡	縄文前期	21 以上	熊本県教 1988
121	熊本県牛深市	椎ノ木崎遺跡	縄文中期～晩期	1?	熊本開発研究センター 1989
122	沖縄県国頭郡宜野座村	前原遺跡	縄文中期・後期	13	宜野座村教 1999
123	沖縄県中頭郡北谷町	伊礼原遺跡	縄文早期～晩期・弥生	1	北谷町教 2007

遺跡の所在地は発掘報告書に記載されている所在地を用い、市町村合併で新しい自治体名になった遺跡についても旧自治体名とした。
文献の略、教：教育委員会、研：研究所、埋文：埋蔵文化財センター、埋文調セ：埋蔵文化財調査センター、埋文調事：埋蔵文化財調査事業団、
文協：文化財協会、奈良研：奈良国立文化財研究所。

表 2 遺跡出土カゴ類・編物一覧表

Table 2 List of basket remains from archaeological sites

遺跡 番号	遺跡名	資料 番号	製品名	時期	素材	底部技法	体部技法	口縁部技法	点数	備考
1	植別川	1	編物(筵状?)	13c 以降					1	
4	十勝太若月	2	網代	8c 末～13c					1	
5	社台 1	3	藍胎漆器片	縄文晩期中葉			網代編み		1	
6	大釜谷 3	4	藍胎漆器	縄文晩期中葉	(タケ)				1	
7	夷王山	5	編物(頭陀袋?)	室町・戦国			もじり編み?		1	
8	朝日山 (2)	6	藍胎漆器	縄文晩期	(?) タケ類	四つ目編み	ござ目編み or 2-3 本飛びござ目編み	じゃばら巻き or えび止め縁	3	
9	三内丸山	7	カゴ	縄文前期?	(?) 単子葉草本類の茎		2:2:1 網代編み		1	三内丸山 63
9	三内丸山	8	編物?	縄文前期?					1	三内丸山 64
9	三内丸山	9	編物	縄文前期?			2:2:1 網代編み (部分的に 3:3:1)		1	三内丸山 41
9	三内丸山	10	編物	縄文前期?			2:2:1 網代編み (部分的に 3:3:1)	折り返し縁	1	三内丸山 43
9	三内丸山	11	編物?	縄文前期?					1	三内丸山 42
10	高館	12	カゴ?	中世	(?) タケ?				1	
10	高館	13	敷物状	中世	(?) フラ?				1	
11	土井 I 号	14	藍胎漆器	縄文晩期前半					16	
12	八幡崎	15	網代	縄文晩期?			網代編み		2	
12	八幡崎	16	藍胎漆器	縄文晩期?					1	
13	戸平川	17	藍胎漆器	縄文		1:1:1 網代編み	1:1:1 網代編み	斜めに編みこみ (写真で確認できず, 記載引用)	1	
13	戸平川	18	藍胎漆器	縄文					1	
13	戸平川	19	カゴ?	縄文	(?) タテ材…木本 (?) ヨコ材…草本?		2 本もじり編み (左) (8-9 段ごとに連続 2 段のもじりあり)		1	
14	蔭内	20	編物						2?	
15	柳之御所	21	編物	12c 前半	(?) タケ?				1	
16	根岸	22	藍胎漆器	縄文晩期					6	
17	山王 (第 10 次)	23	ザル	古墳?		網代編み?	ござ目編み		1	
17	山王 (第 10 次)	24	箕	古墳?					1	
17	山王	25	カゴ?	古墳中期			六つ目編み		1	
18	押出	26	編物	縄文前期	アカソ		2 本もじり編み (「タテ材でもじり」と記載)		1	
18	押出	27	藍胎漆器?	縄文前期	樹皮				1	
18	押出	28	網代							
19	荒屋敷	29	カゴ類	縄文晩期～弥生	タケ類	2:2:1 網代編み	2:2:1 網代編み	折り返し縁	1	荒屋敷 9101
19	荒屋敷	30	カゴ類	縄文晩期～弥生	(?) タケ類	2:2:1 網代編み	2:2:1 網代編み		1	荒屋敷 9105
19	荒屋敷	31	カゴ類	縄文晩期～弥生	タケ類	2:2:1 網代編み	2:2:1 網代編み		1	荒屋敷 9102
19	荒屋敷	32	編物	縄文晩期～弥生	(?) タケ類		2:2:1 網代編み?		1	荒屋敷 9107
19	荒屋敷	33	カゴ	縄文晩期～弥生	(?) タケ類	3:3:1 網代編み	ござ目編み		1	荒屋敷 9104
19	荒屋敷	34	カゴ類	縄文晩期～弥生	(?) タケ類	3:3:1 網代編み	木目ござ目編み	縄目返し縁	1	荒屋敷 9106
19	荒屋敷	35	カゴ類	縄文晩期～弥生	(?) タケ類		飛びござ目編み (ヨコ材…2 越え 2 潜り, タテ材…2 越え 1 潜り⇒1 越え 2 潜り⇒1 越え 1 潜りの繰り返し)	巻縁	1	荒屋敷 9103
20	豊郷条里	36	カゴ?	古墳	(タケ?)				1	
20	豊郷条里	37	箕?	奈良 (8c 前半)	(タケ?)				1	
21	明神前	38	網代	縄文後期	(?) ヨシ		ござ目編み?		1	
22	寺野東	39	藍胎漆器	縄文晩期	(?) タケ?		ござ目編み?		10	
22	寺野東	40	編物	縄文晩期					1	
22	寺野東	41	編物	縄文晩期					1	
23	下田	42	藍胎漆器	縄文					1	
23	下田	43	カゴ	縄文			ござ目編み	巻縁	1	
25	反町	44	カゴ	13c 後半～14c	(単子葉植物)		4:4:1 網代編み	矢筈巻縁 or 巻縁	1	反町 72 の上部
24	反町		カゴ	13c 後半～14c	タケ亜科 (マダケ)		六つ目編み	矢筈巻縁 or 巻縁	1	反町 72 の下部
25	反町	45	編物	古墳前期			ござ目編み		1	反町 73
25	反町	46	カゴ	古墳前期	(ササ類?)	2:2:1 網代編み	下部…2:2:1 網代編み 上部…ござ目編み ござ目編み		1	反町 74-1
25	反町	47	編物	古墳前期	広葉樹樹皮				1	反町 74-2
26	寿能泥炭層	48	藍胎漆器	縄文後期					1	
26	寿能泥炭層	49	編物	縄文後期	ヤダケ属 [PO]		2:3:1 網代編み?		1	編物 1 (残欠 3)
26	寿能泥炭層	50	編物	縄文後期	メダケ属 (アズマネザサ?) [PO]		2:2:1 網代編み		1	編物 2 (残欠 2)
26	寿能泥炭層	51	編物	縄文後期	メダケ属 (メダケ?) [PO]		ヨコ添えもじり編み (左), 網巻縁代編み		1	編物 3 (残欠 1)
26	寿能泥炭層	52	編物	縄文晩期	メダケ属 [PO]		2:2:1 網代編み		1	残欠 4
27	葛西城址	53	編物	中世～近世初頭	(?) タケ		3:3:1 網代編み		1	
27	葛西城址	54	カゴ		(?) タケ		ござ目編み		1	V 130
27	葛西城址	55	カゴ		(?) タケ		六つ目編み		1	V 131
28	北江古田	56	編物(ザル・カゴ?)	縄文中期～後期?			ござ目編み?	縄目返し縁?	1	
28	北江古田	57	編物	縄文中期後半			四つ目編み (ござ目?)		1	
28	北江古田	58	編物	縄文後期			四つ目編み (ござ目?)	折り返し縁?	1	
28	北江古田	59	編物	縄文中期～後期?					1	
28	北江古田	60	編物	縄文中期～後期?			ござ目編み?		1	
28	北江古田	61	編物	縄文中期～後期?	タケ亜科		ござ目編み		1	
29	弁天池	62	カゴ	縄文後期	タケ亜科	四つ目編み (菱四つ目?), 2:2:1 網代編み	四つ目編み		1	
29	弁天池	63	カゴ	縄文後期	タケ亜科	2:2:1 網代編み	四つ目編み		1	
29	弁天池	64	編物	縄文後期	タケ亜科		四つ目編み		1	

表 2 (続き) Table 2 (continued)

29 弁天池	65 編物	縄文後期	タケ亜科	網代編み		1
30 下宅部	66 編物	縄文後期末葉	タケ亜科	2.2:1 網代編み		1 下宅部 1 号
30 下宅部	67 カゴ?	縄文後期末葉	タケ亜科	四つ目編み		1 下宅部 2 号
30 下宅部	68 カゴ	縄文後期末葉		2:2:1 網代編み	ござ目編み	1 下宅部 3 号
30 下宅部	69 編物	縄文後期前葉～中葉	タケ亜科		四つ目編み	1 下宅部 4 号
30 下宅部	70 編物	縄文後期後葉			2.2:1 網代編み	1 下宅部 6 号
30 下宅部	71 カゴ	縄文後期中葉～後葉	タケ亜科	四つ目編み, 帯部…六つ目くずし編み		1 下宅部 7 号
30 下宅部	72 カゴ	縄文後期中葉	タケ亜科	2.2:1 網代編み	ござ目編み, 帯部…ヨコ添え 矢筈巻縁	1 下宅部 8 号
30 下宅部	73 筵	縄文後期中葉～後葉	タケ亜科		もじり編み (左)	1 下宅部 9 号
30 下宅部	74 編物	縄文後期中葉			四つ目編み	1 下宅部 10 号
30 下宅部	75 カゴ	縄文後期中葉～後葉	タケ亜科		1:1:1 網代編み	1 下宅部 11 号
30 下宅部	76 カゴ	縄文後期中葉～後葉		2:2:1 網代編み	飛びござ目編み	1 下宅部 12 号
30 下宅部	77 カゴ	縄文後期中葉		2:2:1 網代編み?	飛びござ目編み	1 下宅部 13 号
30 下宅部	78 編物	縄文後期中葉	タケ亜科		ござ目編み, 帯部…ヨコ添え 矢筈巻縁	1 下宅部 14 号
30 下宅部	79 カゴ	縄文後期中葉	タケ亜科		もじり編み (左)	1 下宅部 15 号
30 下宅部	80 カゴ	縄文後期中葉		3:2:1 網代編み	四つ目編み	1 下宅部 16 号
30 下宅部	81 編物	縄文後期中葉	タケ亜科		3:2:1 網代編み	1 下宅部 17 号
30 下宅部	82 編物	縄文後期中葉	タケ亜科		ござ目編み, 帯部…ヨコ添え 縄目返し縁	1 下宅部 18 号
30 下宅部	83 編物	縄文後期中葉	タケ亜科		もじり編み (左)	1 下宅部 19 号
30 下宅部	84 カゴ	縄文後期前葉～中葉	タケ亜科		六つ目編み	1 下宅部 20 号
30 下宅部	85 編物	縄文後期前葉～中葉			四つ目編み	1 下宅部 21 号
30 下宅部	86 カゴ?	縄文後期前葉～中葉			飛びござ目編み	1 下宅部 22 号
30 下宅部	87 編物	縄文後期前葉～中葉?			飛びござ目編み?	1 下宅部 23 号
30 下宅部	88 編物	縄文後期前葉			六つ目編み	1 下宅部 24 号
30 下宅部	89 編物	縄文後期前葉			四つ目編み	1 下宅部 25 号
30 下宅部	90 カゴ	縄文後期後葉～晩期前葉		2:2:1 網代編み	3:3:1 網代編み	1 下宅部 26 号
30 下宅部	91 ウケ?	縄文後期中葉	タケ亜科		2:2:1 網代編み	1 下宅部 27 号
30 下宅部	92 編物	縄文後期前葉～中葉	タケ亜科		ござ目編み	1 下宅部 28 号
30 下宅部	93 編物	縄文後期中葉～後葉			飛びござ目編み	1 下宅部 29 号
30 下宅部	94 筵	縄文後期前葉	イネ科		飛びござ目編み	1 下宅部 30 号
30 下宅部	95 カゴ	縄文後期中葉			ござ目編み	1 下宅部 31 号
30 下宅部	96 編物	縄文後期前葉			四つ目編み	1 下宅部 32 号
30 下宅部	97 筵	縄文後期前葉			3:3:1 網代編み	1 下宅部 33 号
30 下宅部	98 編物	縄文後期前葉			ござ目編み	1 下宅部 34 号
30 下宅部	99 編物	縄文後期前葉			六つ目編み	1 下宅部 35 号
30 下宅部	100 カゴ	縄文後期中葉～後葉			四つ目編み	1 下宅部 36 号
30 下宅部	101 筵	縄文後期中葉～晩期前葉			四つ目編み	1 下宅部 37 号
30 下宅部	102 編物	縄文後期前葉			ござ目編み	1 下宅部 38 号
30 下宅部	103 カゴ?	縄文後期前葉			飛びござ目編み	1 下宅部 39 号
30 下宅部	104 編物	縄文後期前葉			四つ目編み	1 下宅部 40 号
30 下宅部	105	縄文後期前葉			2:2:1 網代編み	1 下宅部 41 号
30 下宅部	106 編物	縄文後期前葉			1 下宅部 42 号	
30 下宅部	107 カゴ	縄文中期中葉			飛びござ目編み	1 下宅部 43 号
30 下宅部	108 カゴ	縄文後期前葉～中葉			ござ目編み, 帯部…ヨコ添え	1 下宅部 44 号
30 下宅部	109 編物	縄文後期前葉～中葉			もじり編み (左)	1 下宅部 45 号
30 下宅部	110 カゴ	縄文後期前葉～中葉		四つ目編み	四つ目編み	1 下宅部 46 号
30 下宅部	111 編物	縄文後期前葉～中葉			六つ目編み, もじり編み	1 下宅部 47 号
30 下宅部	112 編物	縄文後期前葉～中葉			飛びござ目編み	1 下宅部 48 号
30 下宅部	113 カゴ	縄文後期前葉		2:2:1 網代編み?	四つ目編み	1 下宅部 49 号
30 下宅部	114 編物	縄文後期中葉～晩期前葉			3:3:2 網代編み	1 下宅部 50 号
31 馬場	115 カゴ (箕?)	奈良～平安	(?) タケ?		飛びござ目編み	1
32 国府関	116 ウケ	弥生末～古墳初頭			四つ目編み	1
32 国府関	117 カゴ	弥生末～古墳初頭	(タケ?)		六つ目編み	1
32 国府関	118 カゴ	弥生末～古墳初頭	(タケ?)			数本の割り裂き材が交差
32 国府関	119 編物	弥生末～古墳初頭			2:2:1 網代編み	1
33 常代	120	弥生中期	マタタビ属		六つ目編み	1 常代 375
33 常代	121	弥生中期			ござ目編み	1 常代 376
33 常代	122		マタタビ属			1 常代 377
33 常代	123				六つ目編み	1 常代 378
33 常代	124				ござ目編み	1 常代 379
34 多摩区	125 カゴ	縄文後期前半	(?) タケ亜科	1:1:1 網代編み	ござ目編み?	1 多摩区 F
34 多摩区	126 カゴ	縄文後期前半	(?) タケ亜科			1 多摩区 G
34 多摩区	127 カゴ	縄文後期前半	(?) タケ亜科		網代編み	1 多摩区 H
34 多摩区	128 カゴ	縄文後期前半	(?) タケ亜科		2:1 ⇒ 1:2 ⇒ 1:1 網代編み?	1 多摩区 I
34 多摩区	129 カゴ	縄文後期前半	(?) タケ亜科			1 多摩区 J
34 多摩区	130 カゴ	縄文後期前半	(?) タケ亜科		1:2:1 網代編み	1 多摩区 K
35 池子	131 カゴ	弥生中期後半	口縁部: クマヤナギ属	ござ目編み	四つ目編みに巻きつけ固定	1 池子 88
35 池子	132 ウケ	弥生中期後半			ヨコ添えもじり編み (左)	1 池子 89
35 池子	133 カゴ	弥生中期後半		ござ目編み		1 池子 440
35 池子	134 網代	弥生		六つ目編み		13
36 羽根尾	135 カゴ	縄文前期			ござ目編み	1 羽根尾 64
36 羽根尾	136 カゴ	縄文前期			ござ目編み	1 羽根尾 65
36 羽根尾	137 編物	縄文前期			3:3:1 網代編み(樹網代編み?)	1 羽根尾 66
37 青田	138 カゴ類	縄文晩期終末	イネ科? (ヨコ材)		2:2:1 網代編み (ヨコ材間隔広い)	1 青田 315
37 青田	139 カゴ類	縄文晩期終末	タケ亜科 (タテ材)		ござ目編み	1 青田 316
37 青田	140 カゴ類	縄文晩期終末	スギ, アスナロ		ヨコ添えもじり編み (左)	1 青田 317

表 2 (続き) Table 2 (continued)

37 青田	141 カゴ類	縄文晩期終末	タケ亜科 (ヨコ材)	2:2:1 網代編み		1 青田 318
37 青田	142 網代	縄文晩期終末		網代編み		1 青田 314
37 青田	143 網代	縄文晩期終末	単子葉類 (タテ材)			1 青田 319
37 青田	144 ウケ?	縄文晩期終末	タケ亜科, 針葉樹	2 本もじり編み (右)		1 青田 320
37 青田	145 ウケ?	縄文晩期終末	タケ亜科, 針葉樹	2 本もじり編み (右)		1 青田 321
37 青田	146 編物 (簾状)	弥生中期	タケ亜科, 樹皮	2 本もじり編み (右)		1 青田 322
38 江上 A	147 カゴ	弥生中期～後期		1:1:1 網代編み		1 江上 A128
38 江上 A	148 カゴ	弥生中期～後期		2:2:1 網代編み	1:1:1 網代編み	1 江上 A433
38 江上 A	149 編物	弥生中期～後期		ござ目編み		1 江上 A434
38 江上 A	150 編物	弥生中期～後期		網代編み?		1 江上 A434 の上に重なる
39 桜町	151 カゴ類	縄文中期末～後期初頭	マタタビ属, トネリコ属	1 本もじり編み (左)?	巻縁	1 桜町 1
39 桜町	152 カゴ類	縄文中期末～後期初頭	ニレ属, マタタビ属	2 本もじり編み (左)	巻縁	1 桜町 2
39 桜町	153 カゴ類	縄文中期末～後期初頭	コナラ節, マタタビ属, トネリコ属	2 本もじり編み (左)	巻縁	1 桜町 3
39 桜町	154 カゴ類	縄文中期末～後期初頭	コナラ節, マタタビ属	2 本もじり編み (左)	巻縁	1 桜町 4
39 桜町	155 カゴ類	縄文中期末～後期初頭	コナラ節, マタタビ属, マツ属	2 本もじり編み (左)	巻縁	1 桜町 5
39 桜町	156 編物	縄文中期末～後期初頭		2 本もじり編み (左)		1 桜町 6
39 桜町	157 カゴ類	縄文中期末～後期初頭	ニレ属, マタタビ属	2 本もじり編み (右)		1 桜町 7
39 桜町	158 編物	縄文中期末～後期初頭	コナラ節, マタタビ属	2 本もじり編み (左)		1 桜町 8
39 桜町	159 編物	縄文中期末～後期初頭	マタタビ属?, カヤ	2 本もじり編み (左)		1 桜町 9
39 桜町	160 編物	縄文中期末～後期初頭	ヒノキ亜科	2 本もじり編み (左)		1 桜町 10
39 桜町	161 編物	縄文中期末～後期初頭	ヒノキ亜科	2 本もじり編み (左)		1 桜町 11
39 桜町	162 編物	縄文中期末～後期初頭	ヒノキ亜科	2 本もじり編み (左)		1 桜町 12
39 桜町	163 編物	縄文中期末～後期初頭	ヒノキ亜科	2 本もじり編み (左)		1 桜町 13
39 桜町	164 編物	縄文中期末～後期初頭	コナラ節, マタタビ属	2 本もじり編み (左)		1 桜町 14
39 桜町	165 編物	縄文中期末～後期初頭	ケンボナシ属, マタタビ属	2 本もじり編み (左)		1 桜町 15
39 桜町	166 編物	縄文中期末～後期初頭		2 本もじり編み (左)		1 桜町 16
39 桜町	167 編物	縄文中期末～後期初頭	カヤ, マタタビ属	2 本もじり編み (左)		1 桜町 17
39 桜町	168 カゴ類	縄文中期末～後期初頭	マタタビ属	2:2:1 網代編み	巻縁	1 桜町 18
39 桜町	169 カゴ類	縄文中期末～後期初頭	マタタビ属?	2:2:1 網代編み	巻縁	1 桜町 19
39 桜町	170 カゴ類	縄文中期末～後期初頭	タケ亜科	1:1:1 網代編み	巻縁	1 桜町 20
39 桜町	171 編物	縄文中期末～後期初頭	タケ亜科	1:1:1 網代編み		1 桜町 21
39 桜町	172 編物	縄文中期末～後期初頭	マタタビ属	2:2:1 網代編み		1 桜町 22
39 桜町	173 編物	縄文中期末～後期初頭	広葉樹, マタタビ属?	ござ目編み	巻縁	1 桜町 24
39 桜町	174 カゴ類	縄文中期末～後期初頭	マタタビ属	2 本もじり編み		1 桜町 28
39 桜町	175 カゴ類	縄文中期末～後期初頭	カエデ属, マツ属	2 本もじり編み (左)	2 本もじり編み (左)	1 桜町 29
39 桜町	176 編物	縄文中期末～後期初頭	マタタビ属	2 本もじり編み		1 桜町 30
39 桜町	177 編物	縄文中期末～後期初頭	コナラ節, マタタビ属	2 本もじり編み		1 桜町 31
39 桜町	178 編物	縄文中期末～後期初頭		2 本もじり編み		1 桜町 32
39 桜町	179 編物	縄文中期末～後期初頭		2 本もじり編み		1 桜町 33
39 桜町	180 編物	縄文中期末～後期初頭		網代編み		1 桜町 34
39 桜町	181 カゴ類	縄文中期末～後期初頭	マタタビ属			1 桜町 35
39 桜町	182 カゴ類	縄文中期末～後期初頭	ムクロジ, マタタビ属			1 桜町 36
39 桜町	183 カゴ類	縄文中期末～後期初頭		2 本もじり編み (左)		1 桜町 37
39 桜町	184 編物?	縄文中期末～後期初頭	マツ属	2 本もじり編み (左)?	巻縁?	1 桜町 38
39 桜町	185 カゴ類	縄文中期末～後期初頭	コナラ節, カエデ属			1 桜町 39
39 桜町	186 カゴ類	縄文中期末～後期初頭	タケ亜科, 蔓 or 草本	ヨコ添えもじり編み	矢筈巻縁	1 桜町 40
40 北方 B	187 編物	弥生	カヤ or イチイ	ヨコ添えもじり編み		1 北方 B23
41 真脇	188 カゴ	縄文前期後葉	ヒノキ	2 本もじり編み (左)		1 真脇編物 1
41 真脇	189 カゴ	縄文前期後葉	ヒノキ, 蔓茎	2 本もじり編み (左)		1 真脇編物 2
42 鹿首モリガフチ	190 監胎漆器	縄文晩期	(イグサ様の植物)	1:1:1 網代編み		1
43 谷内ブンガヤチ	191 箕	不明 (奈良～江戸?)	(?) タケ亜科			1 ブンガヤチ YW11a～d
44 荻市	192 カゴ	弥生後期後葉		下部…2:2:1 網代編み, 上部…ござ目編み (1:1:1 網代編み?), 帯部…ヨコ添えもじり編み (左)	巻縁	1 荻市 278
45 戸水 C	193 カゴ	弥生後期～古墳前期	マタタビ	2:2:1 網代編み	1:1:1 網代編み (ござ目?) 帯部…ヨコ添えもじり編み?	1 素材同定のみ
46 西念・南新保	194 カゴ	弥生後期後半	マタタビ属			1 素材同定のみ
46 西念・南新保	195 箕	弥生後期後半	ヤナギ属			1 素材同定のみ
47 大友西	196 網代	平安前期	スギ	3:3:1 網代編み		1 大友西 22
47 大友西	197 網代	平安前期				1 大友西 26
47 大友西	198 編物					1 写真のみ
48 畝田西	199 編物			網代編み?		1
49 金石本町	200 四つ手網繫部	8～9c 前半	スギ			2
49 金石本町	201 四つ手網結束	8～9c 前半	フジ			1
50 福増カワラケタ	202 漆製品 (編物)	奈良～平安		ござ目編み		1
51 中屋サワ	203 編物素材	縄文晩期	イヌガヤ			中屋サワ 1095
51 中屋サワ	204 編物素材	縄文晩期	イヌガヤ			中屋サワ 1096
51 中屋サワ	205 編物	縄文晩期		2 本もじり編み (左)		1 中屋サワ 1097
51 中屋サワ	206 編物	縄文晩期	タテ材…アスナロ ヨコ材…イヌガヤ	2 本もじり編み (左)		1 中屋サワ 1098
51 中屋サワ	207 編物	縄文晩期		2 本もじり編み (左)		1 中屋サワ 1099
51 中屋サワ	208 編物	縄文晩期	スギ	2 本もじり編み (左)		1 中屋サワ 1100
51 中屋サワ	209 編物	縄文晩期	アスナロ	2 本もじり編み (左)		1 中屋サワ 1101
51 中屋サワ	210 編物	縄文晩期	タテ材…マタタビ属 ヨコ材…スギ根材	2 本もじり編み (左)		1 中屋サワ 1102
51 中屋サワ	211 編物	縄文晩期	タテ材…アスナロ	2 本もじり編み (左)		1 中屋サワ 1103
51 中屋サワ	212 編物	縄文晩期	アスナロ	2 本もじり編み (左)		1 中屋サワ 1104

表 2 (続き) Table 2 (continued)

51 中屋サワ	213 編物	縄文晩期			2 本もじり編み (左)	1 中屋サワ 193,194
51 中屋サワ	214 藍胎漆器	縄文晩期	タケ亜科			1
52 高堂	215 カゴ	奈良～平安			3:3:1 網代編み	1
53 荒木田	216 カゴ編物	奈良 (8c 後半)	スギ		2:2:1 網代編み	1 荒木田 115-15
54 佐々木アサ バタケ	217 カゴ	平安～中世	ヒノキ		3:2:1 網代編み	1 アサバタケ I 図 版 26
55 白江梯川	218 カゴ	弥生後期	アスナロ	2:2:1 網代編み	2:2:1 飛びござ目編み (網代 編み?), ござ目編み, 帯部 …ヨコ添えもじり編み (左)	1
56 八日市地方	219 編物 (カゴ)	弥生中期		2:2:1 網代編み	2:2:1 網代編み, 帯部…ヨコ 添えもじり編み (左)	1 八日市編物 1
56 八日市地方	220 編物	弥生中期			ヨコ添えもじり編み (左)?	1 八日市編物 2
56 八日市地方	221 編物	弥生中期			ござ目編み, 帯部…ヨコ添え もじり編み (左)	1 八日市編物 3
56 八日市地方	222 編物	弥生中期			2 本もじり編み (左)	1 八日市編物 4
56 八日市地方	223 編物	弥生中期			2:2:1 網代編み	1 八日市編物 5
56 八日市地方	224 編物	弥生中期			2:2:1or3:3:1 網代編み	1 八日市編物 6
56 八日市地方	225 編物	弥生中期			2:2:1 網代編み	1 八日市編物 7
57 四方谷岩伏	226 カゴ	縄文後期後葉				1 貯蔵穴 2
57 四方谷岩伏	227 カゴ	縄文後期後葉～晩期前アスナロ 半			2 本もじり編み (左)	1 貯蔵穴 9
57 四方谷岩伏	228 編物	縄文後期後葉～晩期前マタタビ 半			ヨコ添えもじり編み (左)	1 貯蔵穴 14
58 糞置	229 編物	弥生～古墳		2:2:1 網代編み	ござ目編み, 帯部…ヨコ添え もじり編み (左)?	1
59 北寺	230 編物	縄文後期前葉			2 本もじり編み (左)	1 北寺 1
59 北寺	231 編物	縄文後期前葉			2 本もじり編み (左)	1 北寺 2
59 北寺	232 編物	縄文後期前葉			2 本もじり編み (左)?	1 北寺 3
59 北寺	233 編物	縄文後期前葉	針葉樹			1 北寺 4
59 北寺	234 編物	縄文後期前葉	針葉樹			1 北寺 5
59 北寺	235 編物	縄文後期前葉	イヌガヤ, ヒノキ属			1 北寺 6
59 北寺	236 編物	縄文後期前葉	スギ, 針葉樹			1 北寺 7
60 瀬名	237 網代	古墳～奈良	(?) ヨシ		網代編み?	
61 有東	238 編物	弥生中期	イネ科ではない		2:2:1 網代編み	1 有東①
61 有東	239 編物	弥生中期	イネ科ではない		1:1:1 網代編み	1 有東②
61 有東	240 編物	弥生中期	イネ科ではない		1:1:1 網代編み	1 有東③
61 有東	241 編物	弥生中期	イネ科ではない		ござ目編み	1 有東④
62 宮塚	242 カゴ	古墳時代初頭?		網代編み?	ござ目編み	1
63 上反方	243 網代		(?) タケ?		網代編み?	
64 メノト	244 編物	縄文後期末			1:1:1 ござ目編み (ヨコ材の 間隔が広い)	1 貯蔵穴 11
64 メノト	245 編物	縄文後期末			2:2:1 網代編み	1 貯蔵穴 11
64 メノト	246 編物	縄文後期末			1:1:1 ござ目編み (ヨコ材の 間隔が広い)	1 貯蔵穴 8
64 メノト	247 編物	縄文後期末			1:1:1 網代編み	1 貯蔵穴 8
64 メノト	248 編物	縄文後期末			六つ目くずし編み?	1 貯蔵穴 8
64 メノト	249 編物	縄文	タケ亜科		2:2:1 網代編み	1 編物 2-1
64 メノト	250 編物	縄文	タケ亜科		2:1:1 網代編み	1 編物 2-2
64 メノト	251 カゴ?	縄文	タケ亜科		ござ目編み (タテヨコ材不明)	1 編物 4
64 メノト	252 編物	縄文	草本双子葉類の茎		2:2:1 網代編み	1 編物 12-1
64 メノト	253 編物	縄文			2:2:1 網代編み	1 編物 12-2
64 メノト	254 編物	縄文	タケ亜科		1:1:1 ござ目編み (ヨコ材の 間隔が広い)	1 編物 13
65 元島	255 編物	中世後半～近世初頭	ヒノキ		3:3:1 網代編み	1
66 角江	256 カゴ	弥生中期	(樹皮, 茎状の植物)		ござ目編み	1 木製品 764
67 松河戸	257 カゴ				ござ目編み	1 SD109
67 松河戸	258 カゴ	弥生前期			ござ目編み	1
67 松河戸	259 カゴ	弥生前期			ござ目編み	1
68 朝日	260 カゴ	弥生中期		2:2:1 網代編み	2:2:1 網代編み	1 朝日 156, 尾 張
68 朝日	261 カゴ	弥生中期		直交して重ねる	下部…ヨコ添えもじり編み (左), 中上部…ござ目編み	1 朝日 157, 尾 張
68 朝日	262 カゴ	弥生中期	アラカシ?		ござ目編み	1 朝日 158, 尾 張
68 朝日	263 カゴ	弥生中期				1 朝日 159, 尾 張
68 朝日	264 カゴ	弥生中期		2:2:1 網代編み	下部…ヨコ添えもじり編み (左), 上部…ござ目編み, 帯 部…ヨコ添えもじり編み (左)	1 朝日 160, 尾 張
68 朝日	265 カゴ	弥生中期末	タケ?	2:2:1 網代編み		1 朝日 161, 尾 張
68 朝日	266 カゴ	弥生中期末～弥生後期			ござ目編み	1 朝日 162, 尾 張
68 朝日	267 編物	弥生中期				1 78W1-17
68 朝日	268 編物	弥生中期	(ワラ状)		ござ目編み	1 78W1-19, 尾 張
68 朝日	269 編物	弥生終末期			2:2:2? 編み	1 78W1-8, 三河 ～三河
68 朝日	270 カゴ残欠	弥生後期～弥生終末期				1 78W1-9, 尾張 ～三河
68 朝日	271 編物	弥生中期末			2:2:1 網代編み	2 資料調査
69 朝日西	272 カゴ	16c～17c 初	(タケ)		2:2:1 網代編み	1 朝日西 115
69 朝日西	273 ザル?				ござ目編み	1 朝日西 202
69 朝日西	274 ザル				3:3:1 網代編み	1 SE71
69 朝日西	275 ザル	16c～17c 初	(タケ)			3 SE03,05,09
70 下津城跡	276 カゴ	中世 (鎌倉・室町?)	(タケ?)			1
72 荒尾南	277 カゴ	弥生後期～古墳前期			網代編み	1 荒尾南 4234
71 荒尾南	278 カゴ	弥生後期～古墳前期			ござ目編み	1 荒尾南 4235
71 荒尾南	279 カゴ	弥生後期～古墳前期		2:2:1 網代編み	ござ目編み	1 荒尾南 4236

表 2 (続き) Table 2 (continued)

72 下之郷	280 編物	弥生中期?	ガマ (DNA 分析)				1	
73 赤野井湾	281 カゴ	弥生後期?		2:2:1? 編み	ござ目編み	巻緑	1	赤野井湾 PL72-1
73 赤野井湾	282 カゴ	弥生~古墳?			ござ目編み	巻緑	1	赤野井湾 PL72-2
73 赤野井湾	283 網代	弥生~古墳?			2:2:1 網代編み		1	赤野井湾 PL73-3
73 赤野井湾	284 網代	弥生~古墳?			2:2:1 網代編み		1	赤野井湾 PL73-4
74 粟津湖底	285 編物	縄文早期前葉			網代編み?		1	粟津湖底 44
74 粟津湖底	286 編物	縄文早期前葉			網代編み?		1	粟津湖底 45
74 粟津湖底	287 編物	縄文早期前葉			網代編み?		1	粟津湖底 46
74 粟津湖底	288 編物	縄文早期前葉					1	粟津湖底 47
74 粟津湖底	289 編物	縄文早期前葉	草本				1	粟津湖底 48
74 粟津湖底	290 編物	縄文早期前葉					1	粟津湖底 49
74 粟津湖底	291 編物	縄文早期前葉				巻緑?	1	粟津湖底 50
74 粟津湖底	292 編物	縄文早期前葉	広葉樹				1	粟津湖底 51
74 粟津湖底	293 編物	縄文早期前葉					1	粟津湖底 52
74 粟津湖底	294 編物	縄文早期前葉					1	粟津湖底 53
75 穴太	295 箕	7c 前葉	(タケ)		ござ目編み	木杵に巻きつけ 固定	1	
76 平城(122次)	296 カゴ		(タケ)				4	
76 平城(139次)	297 カゴ						1	
78 河西	298 箕	古墳後期 (6 世紀代)	ヒノキ, シラキ?		ござ目編み?		1	
79 本郷大田下	299 編物	縄文後・晩期			ヨコ添えもじり編み (左)		1	
80 高宮八丁	300 編物				ござ目編み, 2:2:1 網代編み		1	高宮八丁 344
80 高宮八丁	301 編物	弥生前期中葉~前期末			ござ目編み	木杵に巻きつけ 固定	1	高宮八丁 345
81 鬼虎川	302 箕	弥生	(柔らかい植物)		ござ目編み		1	
81 鬼虎川 (19 次)	303 カゴ	弥生中期初頭	(フジヅル系)		2 本もじり編み (左)	巻緑?	1	
81 鬼虎川(7次)	304 箕	弥生中期	(タケではない)		ござ目編み	ヨコ添えもじり 編み (左)?	1	鬼虎川 383
81 鬼虎川(7次)	305 箕	弥生中期	(タケではない)				1	
81 鬼虎川(7次)	306 ウケ	弥生中期					1	鬼虎川 384
82 巨摩	307 カゴ	古墳前期	(?) タケ	六つ目編み			1	
82 巨摩	308 ウケ	弥生後期					1	
83 山賀	309 カゴ or ザル?	弥生後期	(?) タケ		1:1:1・2:2:1 網代編み	巻緑?	1	
83 山賀	310 ウケ	弥生前期	(?) カヤノキ (先端, タ ケ		ヨコ添えもじり編み (左)	巻緑	1	
84 恩智	311 ザル	弥生中期	(?) タケ		ござ目編み		1	
85 瓜破	312 編物	弥生後期~古墳中期	(?) 樹皮		ござ目編み (下部 2:1:1)		1	
86 佃	313 編物	縄文後期中葉	ヒノキ		2 本もじり編み (左)		1	佃 W7
87 下小名田	314 網代	古墳後期	ヒノキ		3:3:1 網代編み		1	
88 玉津田中	315 箕	弥生中期			ござ目編み	木杵に巻きつけ 固定	1	玉津田中 6196
88 玉津田中	316 カゴ?	弥生中期			ござ目編み, 帯部...ヨコ添え もじり編み (左)	巻緑?	1	写真図版編
88 玉津田中	317 編物?	弥生中期			網代編み?		1	写真図版編
89 丁・柳ヶ瀬	318 編物	弥生前期	アケビ属 イネ科 or カヤツリグサ科		コイリング		1	
89 丁・柳ヶ瀬	319 編物?	弥生前期後半					1	資料 2
90 多肥松林	320 カゴ	弥生中期		2:2:1 網代編み	ござ目編み, 帯部...ヨコ添え もじり編み (左)	巻緑	1	1402.2 端部
90 多肥松林	321 編物	弥生中期			ヨコ添えもじり編み (左)		1	1402.2 の一つ
91 延命	322 ザル	中世	(タケ)		2:2:1 網代編み	巻緑?	1	
92 奥谷南	323 網代	縄文中期	イヌビワ属		2:2:1 網代編み		1	奥谷南 160
92 奥谷南	324 網代	縄文中期	イヌビワ属		網代編み?		1	奥谷南 161
93 居徳	325 カゴ状製品	弥生前期?	ブドウ科				1	居徳 1434
93 居徳	326 カゴ?	縄文晩期~弥生前期	タケ亜科		2:2:1 網代編み		1?	
94 釜ノ口 (8 次)	327 箕?	弥生後期後葉	イネ科・タケ亜科・カヤ ツリグサ科以外 [PO]		ござ目編み, 帯部...ヨコ添え もじり編み (左)	木杵に巻きつけ 固定	1	把手が共伴
95 栗谷	328 ネット状もじり編 み製品	縄文後期	ヒノキ, カヤ		もじり編み		1	
95 栗谷	329 カゴ	縄文後期	口縁部...単子葉植物の茎 部 体部...樹皮		1:1:1 網代編み	もじり編み? (左)	1	
96 布勢	330 カゴ	縄文後期	ヒノキ		2 本もじり編み (左)	縁巻	1	布勢カゴ A
96 布勢	331 カゴ	縄文後期	ヒノキ		2 本もじり編み (左)	縁巻	1	布勢カゴ B
96 布勢	332 編物	縄文後期			ヨコ添えもじり編み (左)		1	
98 福岡	333 カゴ	弥生前期	アケビ属	コイリング	コイリング	返し緑	1	
99 池ノ内	334 編物	弥生後期	(タケ?)		ヨコ添えもじり編み (左)		1	
100 姫原西	335 ザル	特定不可能 (中世以 降?)			ござ目編み?	木杵に巻きつけ 固定?	1	
101 三田谷 I	336 網代	縄文晩期中葉以降	(?) 樹皮		2,3:1:1 網代編み		1	1 号
101 三田谷 I	337 網代	縄文晩期中葉以降	(?) 樹皮		網代編み		1	2 号
102 美作国府址	338 カゴ残欠				2:2:1 網代編み		1	
103 南方前池	339 編物	縄文		2:2:1 網代編み?	2:2:1 網代編み		6	
103 南方前池	340 編物	縄文			ヨコ添えもじり編み (左)		1	
104 百間川米田	341 ウケ	12c 後半~13c 前半	(?) 針葉樹, 草本類		ござ目編み		1	
105 百間川原尾 島	342 カゴ	古墳	タケ		下部...2:2:1 木目ござ目編み 上部...ござ目編み		1	把手が共伴
106 津島	343 カゴ	弥生後期		2:2:1 網代編み	ござ目編み		1	
106 津島	344 カゴ	弥生中期後葉					1	津島 W2
106 津島	345 編物	弥生後期			ヨコ添えもじり編み (左)?		1	津島 W148
106 津島	346 編物	弥生後期			ござ目編み		1	津島 W299
106 津島	347 編物	弥生後期	(ワラカアシの茎?)		ござ目編み	2:1:1 網代編み	1	津島 W300
108 草戸千軒町	348 カゴ	鎌倉~室町	(タケ, 一部桜皮)		3:3:1 網代編み		1	把手が共伴?

表 2 (続き) Table 2 (continued)

109 宮ヶ久保	349 カゴ	弥生		2:2:1 網代編み?	ヨコ添えもじり編み (左)?	1 1-B 溝
109 宮ヶ久保	350 カゴ	弥生		ござ目編み?		1 2-A 溝
110 辻田西	351 ザル	鎌倉～室町?	(タケ)	ござ目編み	巻縁?	2
111 比恵	352 カゴ	弥生後期前葉		ござ目編み	巻縁	1
111 比恵	353 カゴ	弥生中期前半	(木やタケではない)	2:2:1 網代編み	巻縁	1
112 正福寺	354 カゴ・袋	縄文	テイカカズラ属・ウドカズラ	もじり編み		138
112 正福寺	355 カゴ	縄文	テイカカズラ属・ウドカズラ	網代編み		2
113 詫田西分	356 カゴ	弥生中期前葉～中葉		2:1:1 網代編み		1
114 東名	357 カゴ	縄文早期末	ムクロジ or イヌビワ?	2 本もじり編み, 2:2:1 網代編み		1 東名 SK2028
114 東名	358 カゴ	縄文早期末	ムクロジ or イヌビワ?	3:3:1 網代編み	2:2:1 網代編み 帯部…2 本もじり編み	1 東名 SK2160
114 東名	359 カゴ	縄文早期末	ムクロジ or イヌビワ?		六つ目編み	1 東名 AM2080
114 東名	360 カゴ	縄文早期末	ムクロジ or イヌビワ?	2:2:1 網代編み	2 本もじり編み	1 東名 AM2184
114 東名	361 カゴ	縄文早期末	ムクロジ or イヌビワ?		ござ目編み	1 東名 SK1008
114 東名	362 カゴ	縄文早期末	ムクロジ or イヌビワ?	網代編み	ござ目編み, もじり編み	1 東名 SK2066
114 東名	363 カゴ	縄文早期末	ムクロジ or イヌビワ?		網代編み	1 東名 SK2138
114 東名	364 カゴ	縄文早期末	ムクロジ or イヌビワ?		縄目返し縁	1 東名 AM2061
114 東名	365 カゴ	縄文早期末	ムクロジ or イヌビワ?	2:2:1 網代編み		1 東名 AM2117
114 東名	366 カゴ	縄文早期末	ムクロジ or イヌビワ?	2:2:1 木目ござ目編み		1 東名 AM2128
115 平尾二本杉	367 カゴ	古墳		3:3:1 網代編み	ござ目編み	1
116 龍頭	368 編物	縄文後期	広葉樹	網代編み		1 1,SK45
116 龍頭	369 編袋	縄文後期	つる植物	2 本もじり編み (左?)		1 2,SK4
116 龍頭	370 組紐	縄文後期		三つ編み		1 3,SK33
116 龍頭	371 編物	縄文後期	イヌビワ属	網代編み		1 4,SK51
116 龍頭	372 編物	縄文後期	広葉樹	網代編み	巻縁?	1 5,SK28
116 龍頭	373 編袋	縄文後期	つる植物	四つ目編み?		1 6,SK28
116 龍頭	374 編袋	縄文後期	つる植物	2 本もじり編み (左)		1 7,SK11
116 龍頭	375 編袋	縄文後期	広葉樹	2 本もじり編み (左)		1 8,SK17
116 龍頭	376 編袋	縄文後期	つる植物	2 本もじり編み(左)? 2 本もじり編み (左)	木杵に巻きつけ固定?	1 9,SK52
117 下郡桑苗	377 カゴ	弥生中期前葉	(?) マダケ属の地上茎	網代編み?	網代編み? (ござ目編み?)	1 カゴ 1
117 下郡桑苗	378 カゴ	弥生中期前葉	(?) マダケ属の地上茎		四つ目編み?	1 カゴ 4
117 下郡桑苗	379 編物	弥生中期前葉	(?) マダケ属の地上茎		四つ目編み?	1 組物 3
117 下郡桑苗	380 編物	弥生中期前葉	(?) マダケ属の地上茎		網代編み? (四つ目編み?)	1 組物 2
118 横尾貝塚	381 カゴ	縄文早期末頃			ござ目編み	1
119 名切	382 カゴ	縄文中期～後期	(カズラ状)		2 本もじり編み (左)	1 かご 1
119 名切	383 カゴ	縄文中期～後期	(イグサ, カズラ状)		2 本もじり編み (左)	1 かご 2
120 曽畑	384 カゴ?	縄文前期	アケビ, 樹皮		四つ目編み, 2:2:1 網代編み	1 編物 No.1
120 曽畑	385 編物	縄文前期				1 編物 No.2
120 曽畑	386 編物	縄文前期				1 編物 No.3
120 曽畑	387 編物	縄文前期	カシ類		1:1:1 網代編み	1 編物 No.4
120 曽畑	388 ザル?	縄文前期	アケビ	1:1:1 網代編み	2:2:1 網代編み	1 編物 No.5
120 曽畑	389 編物 (カゴ?)	縄文前期	イヌビワ		1:1:1 網代編み (ござ目編み?)	1 編物 No.6
120 曽畑	390 編物 (カゴ?)	縄文前期			1:1:1 網代編み (四つ目編み?) 緑巻	1 編物 No.7
120 曽畑	391 編物	縄文前期			1:1:1 網代編み (四つ目編み?)	1 編物 No.8
120 曽畑	392 編物	縄文前期			1:1:1or2:2:1 網代編み	1 編物 No.9
120 曽畑	393 カゴ?	縄文前期			2:2:1 網代編み	1 編物 No.10
120 曽畑	394 編袋?	縄文前期	カシ類		2:2:1 網代編み	1 編物 No.11
120 曽畑	395 カゴ?	縄文前期	アケビ		1:1:1 網代編み	1 編物 No.12
120 曽畑	396 編物	縄文前期			2:2:1 網代編み	1 編物 No.13
120 曽畑	397 ザル	縄文前期			2:2:1 網代編み	1 編物 No.14
120 曽畑	398 編物	縄文後・晩期			1:1:1 網代編み	1 編物 No.15
120 曽畑	399 カゴ?	縄文前期			2:2:1 網代編み	1 編物 No.16
120 曽畑	400 ザル	縄文前期		2:2:1 網代編み	1:1:1 網代編み, 2:2:1 網代編み	1 編物 No.17
120 曽畑	401 編物	縄文前期			四つ目編み	1 編物 No.18
120 曽畑	402 編物	縄文前期			1:1:1 網代編み	1 編物 No.19
120 曽畑	403 カゴ?	縄文前期	イヌビワ		四つ目編み	1 編物 No.20
120 曽畑	404 ザル?				2:2:1 網代編み	1 編物 No.21
121 椎ノ木崎	405 編物	縄文?			2 本もじり編み (左)	1
122 前原	406 バーキ*	縄文中期～後期	タケ亜科		ござ目編み	1 1 号バーキ
122 前原	407 バーキ*	縄文中期～後期	タケ亜科		ヨコ添えもじり編み?	1 2 号バーキ
122 前原	408 バーキ*	縄文中期～後期	タケ亜科		ござ目編み	1 3 号バーキ
122 前原	409 バーキ*	縄文中期～後期	タケ亜科		ござ目編み	1 4 号バーキ
122 前原	410 バーキ*	縄文中期～後期	タケ亜科		ござ目編み	1 5 号バーキ
122 前原	411 バーキ*	縄文中期～後期	タケ亜科		ござ目編み	1 6 号バーキ
122 前原	412 バーキ*	縄文中期～後期	タケ亜科		ござ目編み	1 7 号バーキ
122 前原	413 バーキ*	縄文中期～後期	タケ亜科		ござ目編み	1 8 号バーキ
122 前原	414 バーキ*	縄文中期～後期	タケ亜科			1 9 号バーキ
122 前原	415 バーキ*	縄文中期～後期	タケ亜科		ござ目編み	1 10 号バーキ
122 前原	416 バーキ*	縄文中期～後期	タケ亜科		ござ目編み	1 11 号バーキ
122 前原	417 バーキ*	縄文中期～後期	タケ亜科		ござ目編み	1 12 号バーキ
122 前原	418 バーキ*	縄文中期～後期	タケ亜科	菊底編み	ヨコ添えもじり編み?	1 13 号バーキ
123 伊礼原	419 ザル	縄文前期	タケ亜科 (リュウキュウチク)		ござ目編み (四つ目編み?)	1

遺物の時期は同定されたものや層位で分かるものを記す。報告書で年代記載が不明瞭な遺物には疑問符を付けた。時期について記されていない遺物は遺跡の時代を記し、疑問符を付けた。素材は、解剖学的に同定されたものはそのまま記入し、植物珪酸体分析 (PO) や DNA 分析などを用いたものは〔〕で囲み記した。明らかに報告者の肉眼による推測である記載は () で囲み素材名を記した。タケ類に関しては、ただ単に「竹製品」や「竹箕」、「竹条」などの記載がある場合は、見た目で判断した可能性が高いので、() で囲んだ。報告書では分析が行われたか判断できないものは素材名の前に (?) を付した。編組技法は、報告書の写真・実測図や実物の資料調査などで観察して記載した。報告書の記載が不明瞭なものや、写真の質や明暗により判断しきれない部分については疑問符を付けてある。製品名は報告書の記載通りに記入した。素材は特別な記載がない限り枝・幹材である。* バーキ: 沖繩の方で、竹で編まれた目の粗い (粗雑に割った竹) ザル・カゴ等の総称 (宜野座村教育委員会, 1999)。報告書に従いバーキとして記載。

ことになる。しかしながら、マダケ属の地上茎の根拠は不明であるため、断定することはできない。また、マダケ属に属するタケ類はマダケとモウソウチクのみではなく、クロチク、ハチク、ホテイチクなどの可能性もある。

以上から、マダケを素材としたカゴ類に関しては少なくとも13世紀後半から14世紀には存在していると言える。またモウソウチクのカゴ類に関しては、いつから存在するのか不明である。モウソウチク自体は植物学的に近世からあるといわれているが(上田, 1968), 遺跡出土カゴ類からは判断ができない。

2) 素材の地域差

編組製品に使われる素材について、地域ごとに遺物数の割合を検討すると、関東においてタケ・ササ類が多くを占めていることと、北陸でタケ・ササ類以外の素材(ヒノキ亜科, マタタビ属, アスナロ, スギ, コナラ節等)が圧倒的に多いことが分かる(図6)。これには地域の植生が大きく関わっており、植生に沿った素材選択がなされていると考えられる。東海においては、タケ類と他素材の割合が同じくらいであり、東海は東北・関東と北陸の中間の傾向がみられた。タケ類は東北・関東から東海付近までの範囲で主に使用されていたことはすでに指摘されているが(佐々木, 2006a), 今回の集成においてもそれが追認できた。また、関西・中国・四国から九州にかけては西へ行くほど他素材の占める割合が大きくなる。これらを考慮に入れると、東海は東北・関東と北陸の中間の傾向があるとともに、関東以東と関西以西の中間的な傾向があると考えられる。

もう少し細かく見ると、北陸においてタケ・ササ類以外の素材が多数を占めているが、おなじく日本海に面した中国地方の山陰側では、鳥取県・島根県でタケ・ササ類以外の素材(マタタビ, ヒノキ, カヤ, アケビ属等)が比較的多くみられ、山陽側の岡山県・広島県でタケ・ササ類のカゴ類が多くみられた(表2)。ただし、日本海側の遺跡と瀬戸内海側の遺跡では時代が異なるため、これが通時的な傾向であるとは言い切れない。また、兵庫県の遺跡はすべて瀬戸内海側であるが、タケ・ササ類以外(ヒノキ, アケビ属, カヤツリグサ科)の素材が使用されている。よって、日本海側においてはタケ・ササ類以外の素材が比較利用されていることが考えられる。

3) 編組技法について

編組技法の中で主にカゴ類に使われているのは「網代編み」と「もじり編み」である。

地域ごとにカゴ・編物類の中で使われる編組技法の頻度をみると、東北・関東では、ごぎ目編みと四つ目編みがもっとも多く、網代編みも同じくらいの割合である(図7)。こ

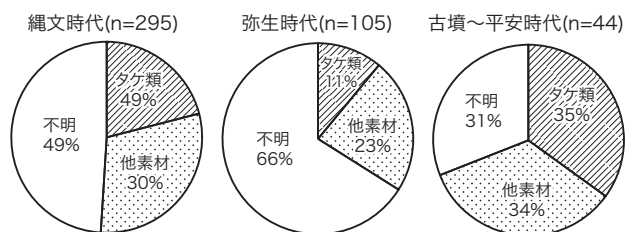


図5 時代別のカゴ類素材の割合 (n は分析対象とした点数)。2つ以上の時代にまたがるものはその遺物が出現する時期の方へ区分した。古墳時代～平安時代については遺物数が少ないことからいくつかの時代を併せて集計した。ここには中世のものも含む。「タケ」、「タケ?」、「タケ・ササ類」など、素材同定はされていないが、タケと推測されているものやササの可能性もあるものは「タケ類」とまとめた。それ以外の素材はすべて「他素材」としてまとめた。「不明」や「未同定」や空欄のものはすべて「不明」とした。

Fig. 5 Composition of basket materials by era (n: number of survey).

れは東海も同様であり、これらの地域においてもじり編みはわずかである。逆に、北陸においてはもじり編みが半数を占めており、網代編みは25%であった。関西・中国・四国においては、網代編みともじり編みとごぎ目編み・四つ目編みがどれも同じくらいの割合である。九州になると網代編みが半数を超えており、次に多いのは「広義の網代編み」とも呼ばれるごぎ目編みと四つ目編みである。

編組製品研究においては、通例として「日本列島の東は網代編み、西はもじり編み」という観念が存在した。しかし、集成結果からは北陸以外でもじり編みが特に目立つ地域はみられなかった。むしろ北陸を除くと全国的に広義の網代編みが多く、素材とも関わってくるのであろう。北陸においては、マタタビなどのつる性の植物が存在し、また針葉樹が多いなど他地域とは異なる素材の使われ方をしている。

しかし新潟県の青田遺跡では、タケ・ササ類が存在しながらもタケ・ササ類のタテ材に他の針葉樹材をヨコ材として利用し、もじり編みをしていたことも分かっている(石丸, 2004)。地域の植生によって、素材に合った編組技法を行ったことは既に多くの研究者が述べているが、その素材に合った編組技法が地域ごとに定着し、編組技法に合った素材選択がなされた可能性も十分にあると考えられる。

編組技法を時期ごとにみると、縄文時代から弥生時代のカゴ類には比較的多くの編組技法がなされている。網代編み・もじり編みなどの基本的な編組技法から木目ごぎ目編みなどの応用的な編組技法、帯部におけるヨコ添えもじり編みなど複雑な編組技法まで、豊富な技法が用いられたカゴ類が多い。しかし、古墳時代になると網代編み・ごぎ目編みがほとんどを占め、編組技法が簡素になる傾向がある。

これは丈夫な素材であるタケ類を利用することが増えていくことによって、ヨコ添えもじり編みなどの補強の可能性をもつ編組技法の必要性が減ってきたことを表していると思われる。また、古墳時代に入って装飾性より実用性を重んじたカゴ類作りが広まる可能性も示しているように思う。

その他の傾向として、もじり編み・ヨコ添えもじり編みのほとんどが左撚りであることが明らかとなった（表2）。この理由としては利き手が関係していると考えられ、右利きの人間がもじりを行うには左撚りの方がもじりやすく、右利きの人間が無意識にもじると左撚りになるとと思われる。このように利き手と編組技法の関係が推測された。

結論と今後の課題

本稿では最初に3つの目的を掲げた。第1は日本列島における遺跡出土カゴ類・編物の集成を行うこと、第2は素材や編組技法における時期差・地域差を明らかにすること、第3は日本列島におけるタケ・ワラ類の導入時期が弥生時代後期であるとする仮説を検証することである。

第1の目的に関しては、集成の結果、123遺跡で1146点以上の遺跡出土カゴ類・編物を確認することができ（表1、図4）、そのうち遺跡出土カゴ類・編物の詳細データを得られたものは684点（約60%）であった（表2）。

第2の目的のうち、素材の地域差については、東北・関東付近にタケ・ササ類素材のカゴ類が多く、西の方へいくにつれてタケ・ササ類以外の素材が占める割合が多くなっていく点を明示した。また、北陸をはじめとした日本海側においてはタケ・ササ類以外の素材が多く利用される傾向があることを示唆した。編組技法では、北陸をのぞき全国的に広義の網代編みが多い傾向を指摘した。また、素材に合った編組技法を定着させるとともに編組技法に合った素材選択がなされていた可能性を指摘した。

第3の目的のうち、ワラ類の導入時期が弥生時代後期であるという仮説に対しては、裏付けをとることができず、画期とよべる時期を特定できない状況であることを明らかにした。タケ素材については、古墳時代以降タケ類素材のカゴ類は増加したと考えられるが画期とは言いがたいという点を指摘した。また、マダケのカゴ類は13世紀後半～14世紀には存在していたと予想されるがモウソウチクのカゴ類については存在時期を指摘することができなかった。

どのような研究を行うにしても、まずは基礎的な情報の充実が不可欠である。基礎的な情報を集める上で、発掘報告書における詳細な記述や図・写真の不足が目立った。素材同定の有無を述べた上での素材の報告や、写真・実測図の充実、また発掘調査におけるカゴ類資料への問題意識が今後の調査や研究において不可欠である。現在特に必要とされているのは、古墳時代以降の遺跡におけるカゴ類の発

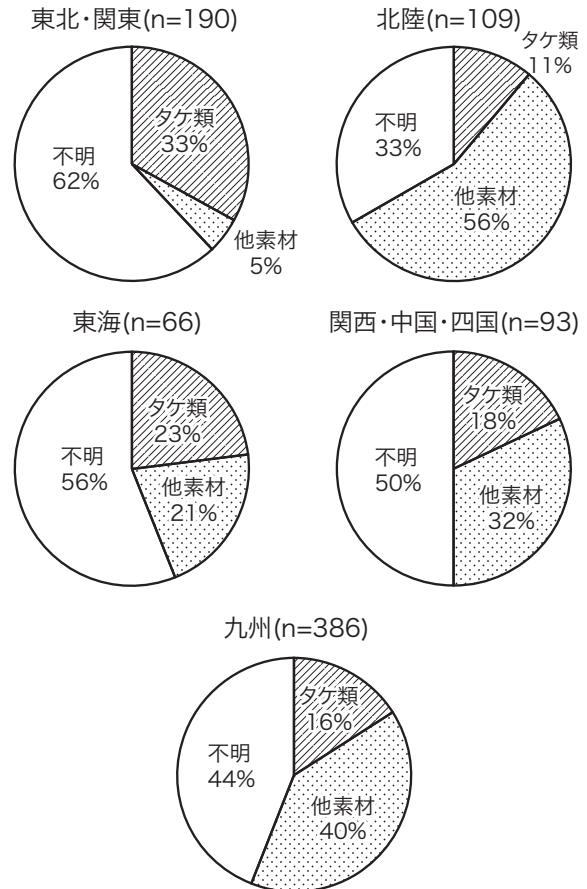


図6 地域別のカゴ類素材の割合（nは分析対象とした点数）。1つの遺物においてタケ類と他素材の両方が使用されている場合は両方の項目にカウントした。

Fig. 6 Regional composition of basket materials (n: number of survey).

掘と弥生時代以降の遺跡出土カゴ類における素材同定である。近年、カゴ類遺物の初現や、出現期の様相が興味の対象となるあまり、弥生時代以降の遺跡出土カゴ類の研究や素材同定、および古墳時代以降の遺跡における発掘調査でのカゴ類への配慮がおろそかになっている面があるように思える。カゴ類の素材の画期をさらに深く検討する上でも、広い時間軸をもった研究や調査が必要である。

本稿においては編布と紐・縄を除外したが、これらの遺物の検討もカゴ類研究には必要である。これらは細い糸状のものを編んだり撚ったりするため、ワラ類が使用されている可能性が考えられる。また、紐・縄に関しては、カゴ類における把手の役割をする可能性があり、今後注目すべき遺物であると考えられる。

カゴ類の時期差や地域差を考える上では、植生と気候を十分に考慮する必要がある。当時の気候などをできる限り

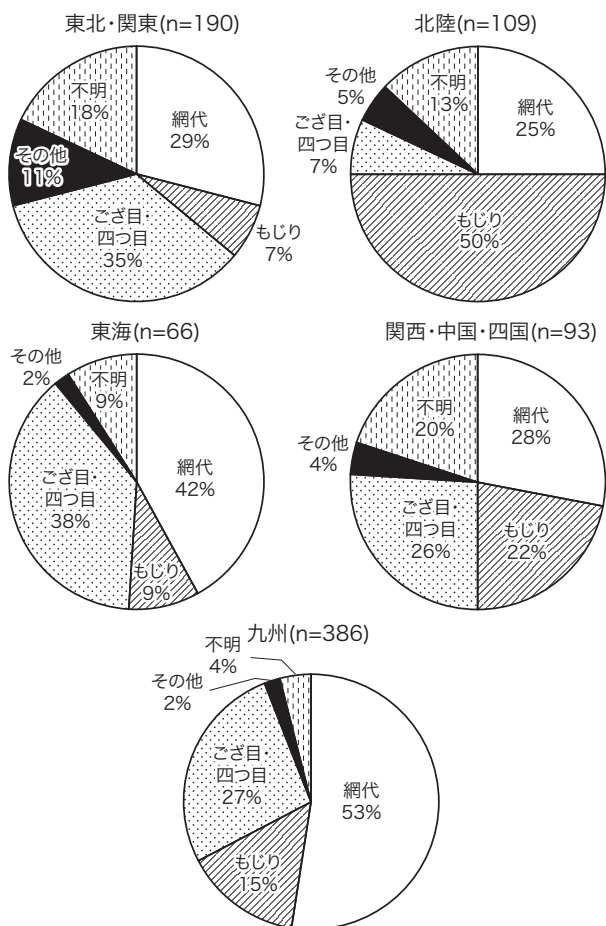


図7 地域別の編み方の割合 (n は分析対象とした点数).
Fig. 7 Regional variety of weaving (n: number of survey).

検討し、素材となる植物がどのような環境に生息していたのか、どのような環境下で人びとが編組製品を製作していたのかを推測し、その上で編組製品の違いを比較することができれば、地域ごとの編組製品の製作における文化や考え方の違いが見えてくる可能性がある。このように、ひとつの観点にとどまらない融合的な研究が今後のカゴ類研究に必要であろう。本稿では、カゴ類・編物の出土点数が少ないことから北海道と沖縄を除外することが多かったが、近隣地域同士の交流があった可能性も否めず、北海道や沖縄のカゴ類の検討も行うことでより研究は深まると思う。

今回、集成を進める上で、報告書に分析結果のみ記載し、考察がなされていないものがたびたびみられた。基本的な情報不足の原因として、分析結果を十分に活用できていない点もあるように感じた。近年、素材同定や年代測定などの科学的分析が進展していく中で、分析を依頼する考古学側と、依頼される植物学や年代学の分析側でカゴ類・編物などの有機質遺物を分析する意義や分析から解明したい事

柄について認識の差があるように思う。考古学側は依頼する目的や情報の用途を明確に伝える必要があり、分析側はそれを十分に理解した上で分析を行うことによって、現在以上に質の高い分析やその活用ができると思う。

有機質で残存しにくく、まだ資料数の少ない遺物といえども、カゴ類研究は現在大きく発展している分野であるといえる。より多くの人に存在を認識してもらい、問題意識を共有し、考古学以外にも植物学や民俗学など多くの分野からの協力やアプローチによって、より多くのことが明らかになると考える。

謝 辞

本稿は2010年1月に名古屋大学文学部に提出した卒業論文に加筆・修正したものである。論文の作成にあたり、指導教官の山本直人先生、梶原義実先生から、厳しくも優しい指導を賜った。また、能城修一氏、佐々木由香氏、工藤雄一郎氏には編組製品研究の基本から貴重なご助言まで多くのことを教わった。資料調査の際には、千葉敏朗氏(東村山ふるさと歴史館)、大野淳也氏(小矢部市教育委員会)、谷口宗治氏・向井裕知氏(金沢市埋蔵文化財センター)、川添和暁氏・鬼頭剛氏(愛知県埋蔵文化財センター)、茶谷満氏・河合章行氏(鳥取県埋蔵文化財センター)、西田巖氏(佐賀市教育委員会)に便宜を図っていただいた。以上の方々には、衷心より御礼申し上げる。また、名古屋大学考古学研究室において相談にのってくださった川崎志乃氏、市川彰氏はじめ院生の方々、同輩の皆に深く感謝します。

引用文献

- 愛知県教育委員会. 1982. 朝日遺跡II. 愛知県教育委員会, 名古屋.
- 愛知県埋蔵文化財センター. 1992. 朝日西遺跡. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第28集. 382 pp. 愛知県埋蔵文化財センター, 弥富町.
- 愛知県埋蔵文化財センター. 2007. 朝日遺跡VII (第2分冊 出土遺物). 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第138集. 303 pp. 財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター, 弥富町.
- 秋田県埋蔵文化財センター. 2000. 戸平川遺跡. 秋田県文化財調査報告書第294集. 337 pp. 秋田県埋蔵文化財センター, 仙北町.
- 青森県教育庁文化課. 1996. 三内丸山遺跡VI. 青森県埋蔵文化財調査報告書第205集. 108 pp. 青森県教育委員会, 青森.
- 青森県教育委員会. 1978. 黒石市高館遺跡発掘調査報告書. 青森県埋蔵文化財調査報告書第40集. 206 pp. 青森県教育委員会, 青森.
- 青森県教育委員会. 1998. 三内丸山遺跡IX—第6鉄塔地区調査報告書2—. 青森県埋蔵文化財調査報告書第249集. 665 pp. 青森県教育委員会, 青森.
- 青森県埋蔵文化財調査センター. 2004. 朝日山(2)遺跡IX. 青森県埋蔵文化財調査報告書第369集. 292 pp. 青森県

- 教育委員会，青森。
- 荒木ヨシ．1968．縄文式時代の網代編み．物質文化 No. 12: 20-26.
- 荒木ヨシ．1970．東日本縄文時代後・晩期の網代編みについて．物質文化 No. 15: 12-18.
- 荒木ヨシ．1971．縄文時代の網代編み．物質文化 No. 17: 29-40.
- 荒木ヨシ．1995．縄文時代に於ける分業の一考察—編物の分析を通して—．物質文化 No. 58: 1-19.
- 阿東町教育委員会・山口県埋蔵文化財センター．1998．宮ヶ久保遺跡．山口県阿東町埋蔵文化財報告第1集．365 pp. 阿東町教育委員会，阿東町．
- 千代田町教育委員会．1983．詫田西分貝塚．千代田町文化財調査報告書第2集．80 pp. 千代田町教育委員会，千代田町．
- E・S・モース．1929．大森に於る古代の陶器と貝塚．「日本その日その日（上）」，371-445．科学知識普及會，東京．
- 藤枝市教育委員会・藤枝市埋蔵文化財調査事務所．1981．宮塚遺跡 潮城跡．81 pp. 静岡県教育委員会，静岡・藤枝市教育委員会，藤枝．
- 福部村教育委員会．1989．栗谷遺跡発掘調査報告書Ⅱ．福部村埋蔵文化財調査報告書第6集．73 pp. 福部村教育委員会，鳥取県福部村．
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター．2004．四方谷岩伏遺跡．福井県埋蔵文化財調査報告書第71集．211 pp. 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター，福井．
- 福井市．1990．福井市史 資料編1 考古．943 pp. 福井市，福井．
- 福岡市教育委員会．1990．比恵遺跡群(9)．福岡市埋蔵文化財調査報告書第227集．160 pp. 福岡市教育委員会，福岡．
- 福岡市教育委員会．1991．比恵遺跡群(10)．福岡市埋蔵文化財調査報告書第255集．274 pp. 福岡市教育委員会，福岡．
- 宜野座村教育委員会．1999．前原遺跡．宜野座村乃文化財14集．302 pp. 宜野座村教育委員会，宜野座村．
- 東大阪市文化財協会．1987．鬼虎川の木質遺物．84 pp. 東大阪市文化財協会，東大阪．
- 東大阪市文化財協会．1988a．鬼虎川遺跡第19次発掘調査報告書．202 pp. 東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会，東大阪．
- 東大阪市文化財協会．1988b．鬼虎川遺跡調査概要Ⅰ—遺物編 木製品—．96 pp. 東大阪市文化財協会，東大阪．
- 広島県教育委員会・広島県草戸千軒町遺跡調査研究所．1993．草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅰ 北部地域北半部の調査．329 pp. 広島県教育委員会，広島．
- 広島県立歴史博物館．2005．重要文化財 広島県草戸千軒町遺跡出土品 指定品目録．176 pp. 広島県立歴史博物館，福山．
- 久田正弘・中川律子・本田秀生・佐々木由香．2008．白江梯川遺跡の琴とかごについて—資料提示と問題提起—．石川県埋蔵文化財情報 No. 19: 53-69.
- 北海道埋蔵文化財センター．1981．社台1遺跡・虎杖浜4遺跡・千歳4遺跡・富岸遺跡．北海道埋蔵文化財センター調査報告第1集．381 pp. 北海道埋蔵文化財センター，札幌．
- 北海道埋蔵文化財センター．1989．忍路土場遺跡・忍路5遺跡．北海道埋蔵文化財センター調査報告第53集．北海道埋蔵文化財センター，札幌．
- 兵庫県教育委員会．1985．丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書．兵庫県教育委員会，神戸．
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所．1998．佃遺跡．兵庫県文化財調査報告第176冊．851 pp. 兵庫県教育委員会，神戸．
- 兵庫県埋蔵文化財調査事務所．1996a．玉津田中遺跡—第5分冊—．兵庫県文化財調査報告第135-5冊．931 pp. 兵庫県教育委員会，神戸．
- 兵庫県埋蔵文化財調査事務所．1996b．玉津田中遺跡—第6分冊—．兵庫県文化財調査報告第135-6冊．3 pp. 兵庫県教育委員会，神戸．
- 稲沢市教育委員会．1982．下津城跡発掘調査概要報告書(Ⅲ)．稲沢市文化財調査報告XVI．7 pp. 稲沢市教育委員会，稲沢．
- 石橋次雄・木村方一・後藤秀彦．1974．十勝太若月—第2次発掘調査—．53 pp. 浦幌町教育委員会，浦幌町．
- 石黒立人．1982．木製品．「朝日遺跡Ⅱ」(愛知県教育委員会編)，41-78．愛知県教育委員会，名古屋．
- 石川県教育委員会．2005．金沢市畝田西遺跡群Ⅱ．152 pp. 石川県教育委員会・石川県立埋蔵文化財センター，金沢．
- 石川県教育委員会・石川県立埋蔵文化財センター．2006．珠洲市北方B遺跡・北方E遺跡・北方池の下遺跡．44 pp. 石川県教育委員会・石川県立埋蔵文化財センター，金沢．
- 石川県埋蔵文化財保存協会．1998．荻市遺跡．131 pp. 石川県埋蔵文化財保存協会，小松．
- 石川県立埋蔵文化財センター．1984．鹿首モリガフチ遺跡．199 pp. 石川県立埋蔵文化財センター，金沢．
- 石川県立埋蔵文化財センター．1986．金沢市戸水C遺跡．219 pp. 石川県立埋蔵文化財センター，金沢．
- 石川県立埋蔵文化財センター．1988a．佐々木アサバタケ遺跡Ⅰ．272 pp. 石川県立埋蔵文化財センター，金沢．
- 石川県立埋蔵文化財センター．1988b．佐々木アサバタケ遺跡Ⅱ．94 pp. 石川県立埋蔵文化財センター，金沢．
- 石川県立埋蔵文化財センター．1989．石川県立埋蔵文化財センター年報9．石川県立埋蔵文化財センター，金沢．
- 石川県立埋蔵文化財センター．1990．小松市高堂遺跡．279 pp. 石川県立埋蔵文化財センター，金沢．
- 石川県立埋蔵文化財センター．1995a．谷内・杉谷遺跡群．658 pp. 石川県立埋蔵文化財センター，金沢．
- 石川県立埋蔵文化財センター．1995b．荒木田遺跡．194 pp. 石川県立埋蔵文化財センター，金沢．
- 石丸和正．2004．6 編組製品．「青田遺跡 本文・観察表編」(新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団編)，209-212．新潟県埋蔵文化財調査事業団，新津．
- 板柳町教育委員会．1993．土井Ⅰ号遺跡．板柳町教育委員会，板柳町．
- 岩手県教育委員会．2001．平泉遺跡群発掘調査報告書 柳之御所遺跡—第52次発掘調査概報—．岩手県文化財調査報告書第111集．275 pp. 岩手県教育委員会，盛岡．
- 岩手県埋蔵文化財センター．1982．料内遺跡Ⅰ．岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第32集．岩手県埋蔵文化財センター，都南村．
- 香川県教育委員会．1990．延命遺跡．572 pp. 香川県教育委員会，高松・香川県埋蔵文化財調査センター，坂出．

- 香川県埋蔵文化財調査センター, 1999. 多肥松林遺跡, 525 pp. 香川県教育委員会, 高松・香川県埋蔵文化財調査センター, 坂出.
- かながわ考古学財団, 1999. 池子遺跡群 X. かながわ考古学財団調査報告 46, 1698 pp. かながわ考古学財団, 横浜.
- 掛川市教育委員会, 2006. 八坂別所遺跡・頭地遺跡・栗下遺跡・メノト遺跡, 125 pp. 掛川市教育委員会, 掛川.
- 上ノ国町教育委員会, 1984. 夷王山墳墓群, 160 pp. 上ノ国町教育委員会, 上ノ国町.
- 金沢市, 1992. 金沢市西念・南新保遺跡 III, 金沢市文化財紀要 99, 394 pp. 金沢市教育委員会, 金沢.
- 金沢市, 2002. 石川県金沢市 大友西遺跡 II (本文編), 金沢市文化財紀要 180, 277 pp. 金沢市埋蔵文化財センター, 金沢.
- 金沢市, 2003. 石川県金沢市 大友西遺跡 III, 金沢市文化財紀要 196, 146 pp. 金沢市埋蔵文化財センター, 金沢.
- 金沢市, 2006. 石川県金沢市 福増カワラケダ遺跡 II, 金沢市文化財紀要 234, 202 pp. 金沢市埋蔵文化財センター, 金沢.
- 金沢市, 2009. 石川県金沢市 中屋サワ遺跡 IV・下福増遺跡 II・横江荘遺跡 II, 金沢市文化財紀要 255, 278 pp. 金沢市埋蔵文化財センター, 金沢.
- 鹿沼市教育委員会, 2002. 明神前遺跡, 鹿沼市埋蔵文化財報告書第 14 冊, 56 pp. 鹿沼市教育委員会, 鹿沼.
- 葛西城址調査会, 1974. 青戸・葛西城址調査報告 II, 173 pp. 葛西城址調査会, 東京.
- 葛西城址調査会, 1975. 青戸・葛西城址調査報告 III, 271 pp. 葛西城址調査会, 東京.
- 葛西城址調査会, 1978. 青戸・葛西城址調査報告 V, 葛西城址調査会, 東京.
- 鹿島町遺跡保護調査会・鹿島町教育委員会, 1983. 鹿島湖岸北部条里遺跡 III, 鹿島町の文化財第 32 集, 20 pp. 鹿島町教育委員会, 鹿島町.
- 春日井市教育委員会, 2000. 松河戸遺跡 安賀地区発掘調査の概要, 25 pp. 春日井市教育委員会, 春日井.
- 木古内町教育委員会, 2003. 大釜谷 3 遺跡, 203 pp. 木古内町教育委員会, 木古内町.
- 君津郡市文化財センター, 1996. 常代遺跡群, 君津郡市文化財センター発掘調査報告書第 112 集, 君津郡市文化財センター, 木更津.
- 北林八洲晴, 1978. (4) 炭化物, 「黒石市高館遺跡発掘調査報告書」(青森県教育委員会編), 260-262. 青森県教育委員会, 青森.
- 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室, 1982. 辻田西遺跡, 北九州市埋蔵文化財調査報告書第 13 集, 313 pp. 北九州市教育文化事業団, 北九州.
- 小松市教育委員会, 2003. 八日市地方遺跡 I, 766 pp. 小松市教育委員会, 小松.
- 高知県文化財団埋蔵文化財センター, 1999. 奥谷南遺跡 I, 高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 37 集, 251 pp. 高知県文化財団埋蔵文化財センター, 南国.
- 高知県文化財団埋蔵文化財センター, 2001. 居徳遺跡群 I, 高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 62 集, 174 pp. 高知県文化財団埋蔵文化財センター, 南国.
- 高知県文化財団埋蔵文化財センター, 2002. 居徳遺跡群 III, 高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 69 集, 356 pp. 高知県文化財団埋蔵文化財センター, 南国.
- 高知県文化財団埋蔵文化財センター, 2003. 居徳遺跡群 V, 高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 86 集, 296 pp. 高知県文化財団埋蔵文化財センター, 南国.
- 淡神文化財協会, 1993. 下小名田遺跡発掘調査概要 IV, 224 pp. 淡神文化財協会, 神戸.
- 工藤員功, 1982. 日本人の生活と文化 6 暮らしの中の竹とわら, 191 pp. ぎょうせい, 東京.
- 工藤 正, 1979. 青森県尾上町八幡崎・李平遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書, 88 pp. 尾上町教育委員会, 青森県尾上町.
- 熊本開発研究センター, 1989. 椎ノ木崎遺跡試掘調査報告書, 120 pp. 牛深市教育委員会, 牛深.
- 熊本県教育委員会, 1988. 曾畑, 熊本県文化財調査報告書第 100 集, 389 pp. 熊本県教育委員会, 熊本.
- 久留米市, 2006. 日渡遺跡群正福寺遺跡第 7 次調査概要報告書, 久留米市文化財調査報告書第 233 集, 17 pp. 久留米市教育委員会, 久留米.
- 松山市教育委員会, 1997. 釜ノ口遺跡 II, 松山市文化財調査報告書第 60 集, 243 pp. 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター, 松山.
- 三方町教育委員会, 1992. 市港遺跡 北寺遺跡, 三方町文化財調査報告書第 11 集, 155 pp. 三方町教育委員会, 三方町.
- 三島町文化財専門委員会, 1990. 荒屋敷遺跡 II 《河岸段丘低湿地の遺跡》, 三島町文化財報告 10 集 埋蔵文化財調査報告書 V, 1048 pp. 福島県大沼郡三島町教育委員会, 三島町.
- 宮城県教育委員会, 1981. 宮城県宮園場整備関連遺跡詳細分布調査報告書, 宮城県文化財調査報告第 75 集, 80 pp. 宮城県文化財保護協会, 仙台.
- 本村充保・相見 梓, 2003. 大和郡山市八条北遺跡・天理市南六條北ミノ遺跡発掘調査 現地説明会資料, 奈良県立橿原考古学研究所, 橿原.
- 長崎県教育委員会, 1985. 名切遺跡, 長崎県文化財調査報告書第 71 集, 202 pp. 長崎県教育委員会, 長崎.
- 永嶋正春, 1985. 縄文時代の漆工技術—東北地方出土藍胎漆器を中心に—, 国立歴史民俗博物館研究報告 No. 6: 1-52.
- 名久井文明, 2004. 民俗的古式技法の存在とその意味 特に編組技法について, 国立歴史民俗博物館研究報告 No. 117: 185-239.
- 奈良県立橿原考古学研究所, 2000. 本郷大田下遺跡, 奈良県立橿原考古学研究所調査報告第 83 集, 214 pp. 奈良県立橿原考古学研究所, 橿原.
- 奈良国立文化財研究所, 1981. 昭和 55 年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報, 58 pp. 奈良国立文化財研究所, 奈良.
- 奈良国立文化財研究所, 1982. 昭和 56 年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報, 62 pp. 奈良国立文化財研究所, 奈良.
- 根室市教育委員会, 1986. 根室市別当賀一番沢川遺跡発掘調査報告書, 108 pp. 根室市教育委員会, 根室.
- 練馬区遺跡調査会, 1989. 練馬区弁天池低湿地遺跡の調査, 234 pp. 練馬区遺跡調査委員会・東京都住宅局, 東京.
- 寝屋川市教育委員会, 1989. 高宮八丁遺跡 木器編, 178 pp. 寝屋川市教育委員会, 寝屋川.

- 新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団, 2004. 青田遺跡. 新潟県埋蔵文化財調査報告書第133集, 405 pp. 新潟県埋蔵文化財調査事業団, 新津.
- 新田町教育委員会, 1994. 下田遺跡. 新田町文化財調査報告書第14集, 163 pp. 新田町教育委員会, 群馬県新田町.
- 野田真弓, 2005. 第3章 青谷上寺地遺跡出土のかご. 「青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告1 木製容器・かご」(鳥取県埋蔵文化財センター編), 93-136. 鳥取県埋蔵文化財センター, 鳥取.
- 能城修一, 1992. 大分県大分市下郡桑苗遺跡(第2次調査)から出土した木製品の樹種. 「下郡桑苗遺跡II」(大分県教育委員会編), 122-143. 大分県教育委員会, 大分.
- 能城修一・佐々木由香・村上由美子, 2009. 1. 反町遺跡出土木材の樹種. 「反町遺跡I」(埼玉県埋蔵文化財調査事業団編), 315-345. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団, 熊谷.
- 能城修一・佐々木由香・鈴木三男・小林和貴・西田 巖・熊代昌之・山田広幸, 2009. 佐賀市東名遺跡と久留米市正福寺遺跡の出土遺物からみた北部九州における縄文時代の編組製品の技法と素材. 「第24回日本植生史学会大会講演要旨集」, 53. 第24回日本植生史学会大会実行委員会, 熊本.
- 能都町教育委員会, 1986. 真脇遺跡. 能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団, 能都町.
- 額田 巖, 1965. 竹細工の民俗学的研究. 物質文化 No. 5: 36-55.
- 岡山県古代吉備文化財センター, 2000. 津島遺跡2. 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告151, 157 pp. 岡山県教育委員会, 岡山.
- 岡山県古代吉備文化財センター, 2002. 百間川米田遺跡4. 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告164, 478 pp. 岡山県教育委員会, 岡山.
- 岡山県古代吉備文化財センター, 2003. 津島遺跡4. 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告173, 759 pp. 岡山県教育委員会, 岡山.
- 岡山県教育委員会, 1974. 中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査3. 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(6), 176 pp. 岡山県教育委員会, 岡山.
- 岡山県教育委員会, 1984. 百間川原尾島遺跡2. 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56. 岡山県教育委員会, 岡山.
- 岡山市教育委員会, 2005. 南方(済生会)遺跡一木器編一, 344 pp. 岡山県教育委員会, 岡山.
- 大垣市教育委員会, 2008. 荒尾南遺跡III. 大垣市埋蔵文化財調査報告書第18集. 大垣市教育委員会, 大垣.
- 大分県別府産業工芸試験所, 1991. 竹編組技術資料 基礎技術編. 大分県別府産業工芸試験所, 別府.
- 大分県別府産業工芸試験所, 1992. 竹編組技術資料 応用技術編. 大分県別府産業工芸試験所, 別府.
- 大分県教育委員会, 1992. 下郡桑苗遺跡II. 大分県文化財調査報告書第89輯, 168 pp. 大分県教育委員会, 大分.
- 大分県教育委員会, 1996. 府内城三ノ丸北口跡, 117 pp. 大分県教育委員会, 大分.
- 大分県教育委員会, 1999. 龍頭遺跡. 大分県文化財調査報告書第102輯, 119 pp. 大分県教育委員会, 大分.
- 大分市教育委員会, 2008. 横尾貝塚. 大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第83集, 344 pp. 大分市教育委員会, 大分.
- 大阪文化財センター, 1981. 巨摩・瓜生堂. 大阪府教育委員会・大阪文化財センター, 大阪.
- 大阪文化財センター, 1984. 山賀(その3). 大阪府教育委員会・大阪文化財センター, 大阪.
- 大阪文化財センター, 1995. 巨摩・若江北遺跡発掘調査報告一第4次一, 351 pp. 大阪文化財センター, 大阪.
- 大阪文化財センター・大阪府教育委員会, 1983. 山賀(その1), 147 pp. 大阪府教育委員会・大阪文化財センター, 大阪.
- 大阪市文化財協会, 2002. 瓜破遺跡発掘調査報告II, 164 pp. 大阪市文化財協会, 大阪.
- 大里雄吉, 1927. 陸奥国は川村中居石器時代遺跡発見の植物質遺物に就いて. 歴史地理 49: 523-530.
- 大角信介・村上由美子・川畑和弘・佐藤洋一郎, 2002. 守山市下之郷遺跡出土の編物に使われた材料のDNA分析に基づく種の推定. 日本文化財科学会第19回大会研究発表要旨集, 42-43. 日本文化財科学会第19回大会実行委員会, 東京.
- 青梅市教育委員会, 1984. 馬場遺跡. 青梅市教育委員会, 青梅.
- 小矢部市教育委員会, 2007. 桜町遺跡発掘調査報告書 木製品・繊維製品・植物編. 小矢部市埋蔵文化財調査報告第60冊, 260 pp. 小矢部市教育委員会, 小矢部.
- 羅臼町教育委員会, 1981. 植別川遺跡. 羅臼町文化財報告6, 49 pp. 羅臼町教育委員会, 羅臼町.
- 佐賀市教育委員会, 2002. 平尾二本杉遺跡I-1区の調査一. 佐賀市文化財調査報告書第131集, 348 pp. 佐賀市教育委員会, 佐賀.
- 佐賀市教育委員会文化財課, 2008. 東名遺跡一第2次調査の概要一. 東名遺跡群発掘調査概要報告書2, 37 pp. 佐賀市教育委員会, 佐賀.
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団, 2009. 反町遺跡I. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第361集, 616 pp. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団, 熊谷.
- 埼玉県立博物館, 1984. 寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書一人工遺物・総括編一. 埼玉県教育委員会, さいたま.
- 桜井市文化財協会, 1991. 桜井市内埋蔵文化財1990年度発掘調査報告2, 52 pp. 桜井市文化財協会, 桜井.
- 山陽町教育委員会・近藤義郎, 1995. 南方前池遺跡一縄文時代木の実貯蔵穴の発掘一, 81 pp. 岡山県赤磐郡山陽町教育委員会, 山陽町.
- 佐々木忠三郎・飯島 魁, 1880. 常州陸平介壺報告. 學藝志林 6: 91-110.
- 佐々木由香, 2006a. 割裂き木部材・蔓・草の編み組み加工容器. 考古学ジャーナル No. 542: 13-19.
- 佐々木由香, 2006b. 6-5 編組製品. 「下宅部遺跡I」(下宅部遺跡調査団編), 147-179. 東村山市遺跡調査会, 東村山.
- 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会, 1997. 穴太遺跡発掘調査報告書II, 341 pp. 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会, 大津.
- 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会, 1998. 赤野井湾遺跡. 琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書2, 2209 pp. 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会, 大津.
- 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会, 2000. 栗津湖底遺跡 自然流路(栗津湖底遺跡III). 琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書3-2, 187 pp. 滋賀県教育委員会

- 会・滋賀県文化財保護協会, 大津.
- 島根県教育委員会. 1999. 姫原西遺跡. 286 pp. 島根県教育庁文化財課・埋蔵文化財調査センター, 松江.
- 島根県教育委員会. 2000. 三田谷 I 遺跡 Vol.2. 斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 VIII. 155 pp. 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター, 松江.
- 島根県埋蔵文化財調査センター. 2003. 権現山城跡. 権現山石切場跡. 白石谷遺跡. 三田谷 I 遺跡. 斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 XV. 71 pp. 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター, 松江.
- 下宅部遺跡調査団. 2006. 下宅部遺跡 I. 1187 pp. 東村山市遺跡調査会, 東村山.
- 静岡県教育委員会. 1983. 有東遺跡 I・I 下. 静岡県文化財調査報告書第 28 集. 217 pp. 静岡県教育委員会, 静岡.
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所. 1994. 瀬名遺跡 III. 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 47 集. 594 pp. 静岡県埋蔵文化財調査研究所, 清水.
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所. 1995. 上反方遺跡. 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 58 集. 46 pp. 静岡県埋蔵文化財調査研究所, 清水.
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所. 1996. 角江遺跡 II. 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 69 集. 628 pp. 静岡県埋蔵文化財調査研究所, 清水.
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所. 2005. 元島遺跡 II. 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 160 集. 630 pp. 静岡県埋蔵文化財調査研究所, 静岡.
- 染矢和徳. 1992. f. カゴ. 「下郡桑苗遺跡 II」(大分県教育委員会編), 88-90. 大分県教育委員会, 大分.
- 杉山寿栄男. 1927. 石器時代の木製品と編物. 人類学雑誌 42: 315-322.
- 鈴木篤英. 2004. III 木製品. 「四方谷岩伏遺跡」(福井県教育庁埋蔵文化財調査センター), 64-66. 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター, 福井.
- 鈴木三男・小川とみ・能城修一. 2004. 3 青田遺跡出土木材の樹種. 「青田遺跡 関連諸科学・写真図版編」(新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団編), 53-70. 新潟県埋蔵文化財調査事業団, 新潟.
- 鈴木三男・佐々木由香. 2006. 7-6-3. 下宅部遺跡から出土した編組製品と繊維の素材同定. 「下宅部遺跡 I」(下宅部遺跡調査団編), 346-351. 東村山市遺跡調査会, 東村山.
- 多賀城市埋蔵文化財調査センター. 1991. 山王遺跡 第 10 次発掘調査概報. 多賀城市文化財調査報告書第 27 集. 多賀城市埋蔵文化財調査センター, 多賀城.
- 多賀城市埋蔵文化財調査センター. 1997. 山王遺跡 I. 多賀城市文化財調査報告書第 45 集. 196, 38p. 多賀城市埋蔵文化財調査センター, 多賀城.
- 玉川文化財研究所. 2003. 羽根尾貝塚. 586 pp. 玉川文化財研究所, 横浜.
- 多摩区 No.61 遺跡発掘調査団. 1998. 多摩区 No.61 遺跡(宿河原縄文時代低地遺跡)発掘調査報告書. 81 pp. 多摩区 No.61 遺跡発掘調査団, 横浜.
- 谷口 肇・山本暉久. 1999. (7) 旧河道. 「池子遺跡群 X」(かながわ考古学財団編), 223-590. かながわ考古学財団, 横浜.
- 栃木県文化振興事業団. 1998. 寺野東遺跡 IV. 栃木県埋蔵文化財調査報告第 208 集. 栃木県教育委員会, 宇都宮.
- 鳥取県教育文化財団. 1981. 布勢遺跡発掘調査報告書. 142 pp. 鳥取県教育文化財団, 鳥取.
- 鳥取県教育文化財団. 1993. 今津塚田遺跡 福岡遺跡 6 区. 鳥取県教育文化財団調査報告書 30. 102 pp. 鳥取県教育文化財団, 鳥取.
- 鳥取県埋蔵文化財センター. 2005. 青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告 1 木製容器・かご. 鳥取県埋蔵文化財センター調査報告 8. 158 pp. 鳥取県埋蔵文化財センター, 鳥取.
- 鳥取県埋蔵文化財センター. 2008. 青谷上寺地遺跡 9. 鳥取県埋蔵文化財センター調査報告 21. 245 pp. 鳥取県埋蔵文化財センター, 鳥取.
- 東京都中野区. 1987. 北江古田遺跡発掘調査報告書 (1). 395 pp. 東京都中野区・北江古田遺跡調査会, 東京.
- 富山県埋蔵文化財センター. 1981. 北陸自動車道遺跡調査報告 上市町木製品・総括編. 上市町教育委員会, 上市町.
- 坪井正五郎. 1899. 日本石器時代の網代形編み物. 東京人類学雑誌 14(161): 440-444.
- 北谷町教育委員会. 2007. 伊礼原遺跡. 北谷町教育委員会文化財調査報告書第 26 集. 581 pp. 北谷町教育委員会, 北谷町.
- 長生郡市文化財センター. 1993. 国府関遺跡群. 長生郡市文化財センター調査報告第 15 集. 418 pp. 長生郡市文化財センター, 茂原.
- 上田弘一郎. 1968. 竹. 238 pp. 毎日新聞社, 東京.
- 植松なおみ. 1980. 古代遺跡出土カゴ類の基礎的研究. 物質文化 No. 35: 20-35.
- 瓜生堂遺跡調査会. 1980. 恩智遺跡. 瓜生堂遺跡調査会, 東大阪.
- 渡辺 誠. 1976. スダレ状圧痕の研究. 物質文化 No. 26: 1-23.
- 渡辺 誠. 1979. 縄文時代の綴じ針. 考古学ジャーナル No. 170: 50-53.
- 渡辺 誠. 1994. 編み物の容器 一籠と笠・箕一. 季刊考古学 No. 47: 35-38.
- 渡辺 誠. 1996. マタタビ製のカゴ類. 名古屋大学古川総合研究資料館報告 No. 12: 83-92.
- 渡辺 誠. 1999. タケ・ワラ以前の編組製品. 名古屋大学古川総合研究資料館報告 No. 15: 73-101.
- 山田昌久. 2003. 考古資料大観 第 8 巻 弥生・古墳時代 木・繊維製品. 369 pp. 小学館, 東京.
- 山形県教育委員会. 1990. 押出遺跡. 山形県埋蔵文化財調査報告書第 150 集. 605 pp. 山形県教育委員会, 山形.
- 山本直人. 1989. 石川県におけるワラ・タケ以外のカゴ類. 石川考古学研究会々誌 No. 32: 39-60.
- 米子市教育委員会・加茂川改良工事関係埋蔵文化財発掘調査団. 1986. 池ノ内遺跡. 米子市教育委員会, 米子.
- 弓 明義. 1998. 吉見町三ノ耕地遺跡の集落と水場. 考古学ジャーナル No. 436: 25-27.

(2011 年 1 月 14 日受理)